超・魔法！？

若草赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超・魔法！？

【Ｎコード】
Ｎ８９３８Ｊ

【作者名】
若草赤

【あらすじ】
重力制御――それが物ならば、その物にかかる重力を変えれる力。
……を持った日常に生きる少年と、
呪文破棄（スペルディスペル）――魔法に掛かる不都合を問答無用で全て消せる能力を持った非日常（魔法）の世界に生きる少女との物語。
「超能力者って、俺だけじゃねえの！？」

重力制御

重力制御――それが物ならば、隕石だろうが地球だろうが――その物に掛かる重力を変える能力。

……を持っている少年は勉学に勤しんでいた。

「うへぇ。数学どんだけ変数使えば気が済むんですか？」

地球をブラックホールに変えてやろうか？　あん！？　とか長テーブルに突っ伏しながら思うのだが、

「そんなの無理だっつうの……」

そう、少年にそこまでの力など無い。

地球全体の重力を変えようと頑張ったとしても精々、０．０１Ｇぐらいだろう。

影響力なんて全く無い。

と、

「啓太♪　何が無理なの？」

高校一年生の川平啓太　（けいた）　は、艶やかな黒髪でセミロングの少女を一瞥する。

少女の名前は小金井春香。

啓太の幼なじみである。

春香は美人と可愛いの中間のような顔立ちで、男子からは敬意を表してこう呼ばれる。

……『美少女』と。

啓太が「お前ら……美人か、可愛いかで揉めてんじゃねえよ！

……あ？　美少女でいいんじゃね？　可愛いと美人の中間という意味で」と、こんな感じで呼ばれるようになったのである。数ヶ月前の事だった。

「何が無理って……」

ここは教室、時間は五時、人数は五人――所謂、補習だ。

「全部？」
「せっかくの夏休みですよ！？　なのに……ラブ！　がない～！！」
むぎゃあ！　と数学のプリントを机に叩きつけたモテない　（負け犬）　金髪が吼える。
「負け犬ですよ。所詮俺らなんて」
高校に入れば、彼女が出来るかな～？　なんて淡い期待を抱いて金髪にしてしまった高校デビュー失敗作――谷口陸が敗戦後のボクサーみたいに力無く笑う。
「どっかの天空の城から女の子が落ちて来ないか」
「あ～。空飛ぶ不思議石持った女の子が落ちて来ないかなぁ」
「どっちも同一人物！？」
と、春香が渾身のツッコミを放った所で、
「プリントは終わったんですか～？」
ガラガラと建て付けの悪い戸を開けて入って来たどちらかと言うと『可愛い』に分類される女性が言う。
福田先生は、プリントを刷って来たらしく、両手一杯に抱えている。
「ナナ先生……俺らの実力でコレが解けるとでも？」
啓太があははっ、と爽やかに笑いながら言う。
「小金井さんが居るでしょ？」
「春香は頭良いけどですね。解き方を教えてくれるだけで、しかも訳分かんないし……」
頭良い奴＝教え方が上手い、では無い。
頭良い奴は、「何で分かんないの？」とか素で言うからムカつく。
と、啓太は愚痴ってみる。
「何で分かんないの？」
と不思議そうに春香は首を捻る。
「クソっ！　やっぱり言いやがったよ！　コイツ！」
「何を？」
「チクショウォォ！」

啓太の絶叫の後、陸が
「落下系ヒロイン、猫耳、ヤンデレ、クーデレ、ツンデレ――ハーレム王に俺はなる！」
と先生に向かって言い放ったのは空耳だと信じたい。
――――――――――
「ふう」
と啓太は六畳一間の寝転がっていた。
晩ご飯を食べて、休憩中だ。
部屋の隅に置いてある宿題の山を一瞥し、「明日でいいか」という結論に達する。
卓袱台の上にあったスチール缶を手に取って力を入れる。
ベキン！　とスチール缶が縦に『押し潰される』
十センチぐらいあったスチール缶はニセンチぐらいになる。
新品のでやった時は、大変な事になったのを覚えている。
「やっぱ、力を急激に使うとしんどいな……」
急に襲ってきた疲労感が身体を重くさせる。
重力制御――手首から上で触らなければ、効果は無い。だが、触ったなら三秒の間だけなら触らなくても重力を変えられる。
「まあ、不都合はそんな無いんだけどさ……」
ケータイを時計代わりに使わない少年――川平啓太は目覚まし時計を見る。
「七時かぁ……」
もう勉強する気も無いし　（元々無い）　かといって寝るには早いし、とベッドに目をやる。
布団がベッドから崩れ落ちていた。
よろよろと起き上がり、ベッドメイキングを完璧にこなし、満足そうに頷く。
そして、テレビでも見るか、とリモコンを手に取ろうとする。
直後啓太は思い出す。
「あ！　今日は、『トライアル』の発売日だ」

少年漫画で十三巻目なのだ。
必殺技シャイニングソウルを覚えている途中だった。
啓太は自転車の鍵を取り、部屋を出た。

重力制御（後書き）

指摘や感想や評価を下さいお願いします！

あ……鍵閉め忘れた

「本屋開いてねえから、コンビニだな」
自転車をこぎながら独り呟く。
チョコレートとミルクティーでも買って帰るか。
と、漫画のついでに買う物を決めて自転車の速度を上げる。

――――――――――

買い物を終え、ボロい木造アパートの古びた玄関をくぐり抜けた所にある階段を無視して、通路を歩いていく。
啓太は自分の部屋の前まで来て、
「げっ……！！」
ダラリと嫌な汗が流れる。
ドアが半開きの状態だったのだ。
啓太は、本気で祈りながらネームプレートを見る。
『川平』
「はは、嘘だろ？」
泥棒入って、通帳とか盗まれたんじゃねえだろうな。
自分の不用心さに怒りを覚えながら、部屋に入る。
靴の跡がはっきりくっきりと残っていた。
「通帳！」
慌てて部屋に入り、箪笥（たんす）　を開ける。
しっかりと通帳と判子が入ってあった。
「ふう～。取り敢えず良かった……」
緊張が一気に弱まり、思考力が回復してきた啓太は、部屋を見回す。
荒らされはいない。
「？？？」
良く見ると、足跡は部屋を横切るように付いている。
まるで、部屋を通路に使ったかのように。

そして、足跡の種類は二種類。
一つは、大人で男の足跡。
二十八センチメートルかそこら辺りだと思う。
男だと思った理由は女の人でそこまで足が大きい人も珍しいと思うからだ。
もう一つは、二十二という所だろうか。
靴跡は窓の前で途切れていた。
窓は開いてあるから、多分そこから出たんだろう、と推測してみる。
「……通路として使ったのか？」
意味が全く分からない。
啓太は一応、無くなった物が無いか調べてみる事に決める。
調べた所、無くなっている物は数学の宿題のみだった。
「まあ、どうせ今日はやらなかったしな」
明日の補習の時にでもまた貰うか、と頭の片隅で考えながら雑巾を台所から持ってきて、足跡を消していく。
と、
せっかくベッドメイキングしたのに布団が不自然に盛り上がっていたのを見た。
啓太はおもむろに、布団を引っ剥がした。
「おりゃあ！」
女の子が居た。
「へ」
激しく意味不明。
茫然自失とすること数十秒。
……もしかして。
「この足跡の娘？」
それぐらいしか思い付かない。
思い当たらない。
啓太には、土足で勝手にアパートに入って来てベッドで寝るよう

な知り合いは居ないし恋人だって勿論居ない。
「……ん」
銀髪を腰ぐらいまで伸ばした女の子が身じろぎするように動く。
瞳は閉じているので瞳の色などは分からないが、可愛い顔立ちをしている。
十四才か十五才だと思う。
「え……と……」
起こして良いのだろうか？
でも、その幸せそうな、ふにゃりとした無邪気な寝顔を見ていると。
何となく起こしづらい。
「……うううう……ん……くぅ……」
数秒程悩み――布団を被せてやった。
今日は床で寝ないとなぁ。

あ……鍵閉め忘れた（後書き）

指摘、感想、評価、下さい。お願いします。

少女の名は『アルファ』

チチチ、と小鳥の囀りが朝を知らせる。
啓太は、囀りを聞いてああ、朝なんだなぁと魂が抜け落ちように呟く。
別に、女の子が部屋に居て緊張して眠れなかった、という訳ではない。
ギシ……とパイプで作られているベッドが軋む。
啓太は、おもむろに右手を上げてベッドから転落しそうになる少女を押し戻す。
「すぅ……すぅ」
少女は物凄い寝相が悪い。
啓太が徹夜で看ていないとダメな程。
お陰様で睡眠不足です。はい。と、漫画を読み始める。
トライアルはもう二、三回読んだのだ。
「……」ペラとページを捲る。
「すぅすぅ」
啓太はチラッと、目覚まし時計を見る。
針は、七を指している。
七時って事は目覚まし鳴るなあ、と思い卓袱台に乗っている目覚まし時計のスイッチを切る。
只の時計に成り下がった目覚まし時計を再び卓袱台に乗せて少女の顔を見ながら、一晩中考えていた事を考える。
足跡の人の事を知ってると見て間違いないよな。
でも、足跡の人と窓から出なかったという事は……。
「追われてた？」
嫌な結論になんとも言い難い感情が押し寄せてくる。
追われてて、この部屋に入りベッドに隠れて逃げ延び、そしてその後、緊張の糸が一気に緩んで寝てしまったとか。

少女は可愛らしい顔立ちをしている外国人だ。
それだけで襲われる理由だってある。
あるけれど、啓太は否定してみる。
足跡の人とは何の関係も無くこの娘が自分の部屋だと間違ってふらふらと。
だけど、それは有り得ない。
アパートには、銀髪の外国人少女が居るなんて聞いていないからだ。
この近くには、こんな木造アパートなんて無いし間違える事なんて皆無に決まっている。
なら、泥棒だろうか？
それも有り得ないだろう。
盗みに来ておいてベッドで寝るような大胆不敵な泥棒なんて聞いた事も無いし、この無邪気に眠る少女が泥棒なんて信じたくないのだ。
なら……？
「またこの結論！」
むぎゃあ！　と頭を掻き毟る。
「まあ、いいや……」
この娘が起きたら、教えて貰おう、と心に決め、トイレに向かう。
小便をし、手を洗い卓袱台に向かう。
と、
少女がうーん、と気持ちよさそうに伸びをしていた。
少女は、澄んだ緑の目をしていた。
エメラルドグリーンというやつだ。
綺麗な大きな目をキョロキョロと猫みたいに動かし、
そして、『日本語ではない何か』で二、三喋る。
がっ！？　と声を掛けようとしたままで固まる　（フリーズ）　。
女の子が自分の部屋のベッドに寝ているという『異常』のせいで全く『普通』の事を考えていなかったが、啓太は英語なんて出来無

い。
中学一年生の英語さえ危ない。
逃げ出すか……。
半ば本気でそう思った所で、
少女は啓太に気付いたのか、にこりと微笑んで、ベッドの上で正座をする。
「私の名前はアルファ＝ロートネルって言うんだよ」
ひゃあっ！？　と声を遮断するように両手で鉄壁のガードを作り、叫ぶ。
「アイキャンノットスピークイングリッシューーーーー！！」
……って日本語？
「自己紹介が終わった所で何か食べ物無い？　私、日本に来てから全然食べ物食べて無くて……」
αと自己紹介したふざけた少女が初対面の人に向かってふざけた事を言った。
つーか今さっきの台詞は丸々無視？
「えーと……エーさん？」
「アルファ＝ロートネルって言うんだよ？」
さっき自己紹介したじゃん。とちょっぴりむくれながら言った。
正真正銘の名前なのか……まあ、外人さんだしな。と納得する。
啓太とアルファ＝ロートネルは卓袱台の上にある食べかけのチョコレートを見る。
「……」
ぐぎゅるるー。
アルファから、大音量の腹の虫が。
アルファはちっとも気にせずにくんくんとチョコレートの匂いを嗅ぎ、キラキラと目を輝かせ啓太を見る。
啓太は、恥ずかしがってくんねえかなぁ、女の子なんだし。とは思うが口には出さない。
「あ～、食ってもいいぞ」

チョコレートを手に取り、渡す。
「ありがとう、いただきます」
アルファはチョコレートを受け取りりあ～、と口を開けた所で啓太は気付く。
『食べかけ』のチョコレートだという事実に。
啓太の動きは速かった。
能力を発動させ、チョコレートに掛かる重力を強くさせて、チョコレートを奪い取り、食べる。
その間一秒かかるか、かからないか。
アルファは、チョコレートを持っていた手を呆然と見つめて呟く。
「ルボルグの大魔法……？」
「いや、魔法じゃなくて超能力って言った方がニュアンス的には正しいと思うんだが」
啓太は心は戦々恐々、顔は苦笑いで言う。
魔法の種類を言った所を見ると、魔法を信じるロマンチスト（夢見がち）な娘のだろうか？　と、アルファ＝ロートネルの認識（と言ってもさっき喋っただけなのだが）を改める。
「超、能力？」
初めて聞く単語なのか、首を傾げる。
「あらゆる物……まあ、生き物以外の物に掛かる重力を変えられるっていう能力を持ってんだよ」
ほら、とアルファのどこでも売ってそうな白いTシャツを触り、能力を発動する。
「重くなった……！？」
アルファは驚愕を露わにし、立ち上がりぴょんぴょんジャンプしたりする。
啓太は自分の能力を説明した所で、アルファに訊く。
「お前、なんでベッドに――」
――入ってたんだ？　と訊こうとした所にぐぎゅるるーとタイミング良くアルファの腹が鳴った。

「おなかすいた」
ぐぎゅるるー。
捨てられた子犬のような目をして啓太を見る。
ばつが悪くなった啓太はあー！　もう！　と、冷蔵庫からにぼしとアーモンドという組み合わせの食料品をアルファに渡す。
「んで？　何でベッドで寝てた訳？」
「ん？　追われてたから、ベッドに隠れたんだけど？」
……まあ、予想の範疇だと、思う。
大方、逃げ道が無くなり賭けでドアノブを回したら意外にも鍵がかかって無く、部屋に入りベッドに隠れてやり過ごしたという所だろう。
ベッドに靴が乗っているのが証拠だ。
……後でシーツ洗わねえとな。
「何で追われてんだ？」
「私は呪文破棄　（スペルディスペル）　を持ってるから」
「は？」
呪文破棄を持ってるからという『異常』な答えは予想外だった。
不良に絡まれてとか、そういう『非日常』な答えを予想していた。
「スペルディスペルねぇ……」
目の前に居るアルファの真剣な顔を見る限り満更嘘でもなさそうだ。
なら、呪文破棄って何だ？　と思った瞬間、見計らったかのようにアルファが話し始める。
「呪文破棄っていうのは大魔法とか超・魔法の不都合を全て掻き消す力で――って、何で無言で漫画を読み始めるの？」
「人が真剣に話を聞いてやれば図に乗りやがって、何が魔法だ？二次元に帰れ」
ロマンチスト　（夢見がち）　な娘の妄想でありフィクションな話を訊く趣味など啓太には無い。
むぅぅ！　とむくれているが無視。

だけど、足跡の人は何だったんだろう？
アルファの妄想に付き合っている心優しき人……では無いだろう。
じゃあ、何者だ？
「そんな能力があるクセに……」
アルファが、唇を尖らせて言う。
確かに、と啓太は思う。
啓太は生きる『非常識』だ。
魔法使い何ていう有り得ない『フィクション』が居るかも知れない。
……という結論にはやはり行き着かない。
行き着かないが、話だけは聞いてやろうと思った。
自分が塵ぐらいにしか影響を及ぼせなかった年の頃には、みんな啓太の超能力の事は信じなかったのだ。
信じられない悲しみは痛い程分かる。
「はあ、んで？　追ってるのは魔法使いな訳？」
「うん」
こくりと頷いた。

魔法使い

「その布団に隠れてた事も見破れなかった間抜けな魔法使いに追われてんのは『呪文破棄』っていう能力のせいだって事だな？」
アルファ＝ロートネルはこくん、と頷いてアーモンドを口に入れ、でも、と続けて。
「私が魔法を使ったから気付かれなかっただけなんだよ」
……は？
口が開かないというのはこういう事を言うのだろう。
「おまっ、全然魔法使いってかっこしてねえじゃねえか！」
半袖半ズボンという色気も何も無い恰好をしている。
（確認した訳では無いが）十五歳の女の子がなんて色気無い恰好してんだよ！　つーか、短パン小僧じゃねえか！　というような恰好をしているが――普通の恰好ではある。
とてもじゃないが、魔法使いとは思えない。
「……はあ」
アルファは、重い溜め息を吐き出し馬鹿を見る目で啓太を見る。
「何だよ！」
「魔女狩り何てあったのに懲りずにローブを着て「私は魔法使いで～す」なんて言うと思う？」
「……う゛」
あまりの正論に息を詰まらせる。
「ローブや、魔法を使うのに必要な服装をする時には、森の中を使うしね」
「ふ～ん。お前も魔法使いな訳だよな？」
「うん。魔力の量は凄い少ないけど」
「じゃあよ！　俺も魔法使えんのか？」
「使えるよ」
教えてくれ、と頼み込む。

――――――――――

そして、初心者がする魔法陣からの魔法の発動を教えて貰える事となった啓太は、材料を胡散臭そうに見る。

魔法が本当ならば魔法使いになれて、魔法がアルファの嘘ならばそれが分かるという啓太にはなにも損をしない話だ。

……のだが、やっぱり少しは期待していたりするのだ。

「魔法陣ってコレ？」

卓袱台の上に青い布と、チョコレートに付いていた銀紙、水糊が無造作に置かれている。

嘘臭ええ。

「うん。あとは、マジックでシーツアの魔法陣を描いて完成」

全てに意味があり、究極とも言える魔法陣なのだが、啓太は分からない。

あ～糞ッ！　もういいわ！　とヤケクソ気味に渡したマジックで奇怪な図を描いていく。

良く漫画とかで見る六芳星なんかとは違う、図だった。

「槍は、獅子座に向いてるし……」

水糊が槍かよ……と脱力しそうになる啓太。

アルファは、うんよし。と満足げに頷き、図の真ん中大きな空白に啓太の手を誘う。

そして、啓太の手が付いた瞬間――何も起きなかった。

「「は？」」

……。

気まずい沈黙が二人を包む。

例えるなら、エレベーターの中のような喋ってはいけない雰囲気。

頼みます！　何か喋って下さい！　千円までなら上げるんでぇぇ！　と啓太は切に願う。

しかし、アルファは茫然自失としていて間違いなくこの雰囲気には気付いていない。

故に、喋る事は無いだろう。

「あ～……調子が悪い時だってあるよね♪」
明るく軽めに言って、補習の用意をする。
「可笑しい！」
不意に、アルファが叫ぶ。
「な、何が！？」
突然の事に驚きながら問う。
「魔力が無いなんて……死人？」
「人を勝手に殺すな！　糞馬鹿魔法使い！」
恐る恐るといった感じで訊く少女に苛つきながら言った。
誰だって、殺されるのは嫌なのだ。
「……魔法使えんだろお前は」
「うん」
まだ、う～んとか唸っている少女に言う。
「じゃあさ、その魔法陣で魔法を発動させてよ」
少しだけ逡巡した後、ひたりと奇怪な図の空白に掌を押し付ける。
軽く、電車の切符を買う時のように掌を卓袱台に押し付けた瞬間、
布が卓袱台を包み込んだ。
明らかに、布は卓袱台を包み込む程無かった筈なのに。
啓太は驚き、この続きを固唾を飲んで見守る。
が。
何も起きない。
「……あ？」
拍子抜け。
今の啓太にはこれ以上ぴったりな言葉は無い。
「え～……これだけ？」
「え？　うん、そうだけど？」
何だよそりゃあぁ！　と、何故だかやり切れない物を感じる啓太
は確信した。
――魔法は本当にある、と。
布の大きさを変えれる時点で可笑しい。

人の家に侵入してまで魔法という『フィクション』の存在を押し付けようとも思わないだろうし。
けれど、十五年の常識は結構強い物で。
「手品……とかじゃねえよな？」
「当たり前だよ！」
憤慨だ。というようにぷんぷん怒る少女をごめんごめん、と宥めてから思わず身震いする。
魔法という存在に身震いする。
魔法使いに追われてるって言うのは本当だという事実に身震いする。
そして、
外に叩き出すという選択肢は綺麗サッパリ消えていたから、魔法使いとの闘いを考えたからこその身震い。
もう、後戻りなんて出来ない。
啓太には『力』があるのだから、『力が無い』という理由で見て見ぬふりをするのは無理だ。
それに、『力』が無くてもアルファの事を守ろうと思っただろう。
女の子を追い回す魔法使いを意地でもぶっ飛ばす為に。
ケータイを手に取る。啓太の中ではアルファを匿うのは決定事項な訳で、
「休むって連絡しとくかぁ」
補習の補習とかあんのかな～、とか考えながら学校に連絡する。
『はいはい。倉岳高等学校です』
ナナ先生の声がした。
「ゴホゴホ……先生、熱が出たので休みます……ガホゴホ……（あ～、喉痛い）」
ぼそりと聞こえるぐらいの声で『病人アピール』をするのを忘れない。
何回かズル休みをした事があるのでお手の物である。
『喉飴とか舐めといた方がいいですよ？　風邪を舐めると痛い目に

遭いますからね～』
「はいはい、分かりましたぁ……ゴホゴ「啓太？　大丈夫？　いきなり咳き込んだりして」ゴホゴホ！　（アルファ！　要らねえ事言ってんじゃねえ！）　あ～。熱でくらくらするぅ～！」
最早、棒読みでぐだぐだな演技で乗り切ろうとする啓太。
『ちょっと！？　嘘っぽい演技が！　そして、女の子の声がしたけどどうしたんですかぁ！！　ま、まままさか、同棲なんていう高校生にあるまじき、体験を！？　不純です！　女の子とは、もっと清い交際というかをしてからですね！　そして、次のステップだというのに、川平君は飛ばしに飛ばしまくって同棲ですか！！　彼女さんも――』
「何で同棲とか勝手に決めるの！？　先生の方が不純じゃん。俺は、あのあれ、不良から女の子を守るっていう……ゴホゴホ……熱が上がってきたぁ」
『まだ、演技を続けるのですか！？』
「え？　演技だったの啓太？」
「じゃあ、先生三十六・五度の熱で休みます！」
『それは熱じゃな――』
通信を切る。
そのまま、電源も切る。
一生学校行きたくないと本気で思う。
「……はあ」
啓太が割と本気で沈んでいると、アルファはおもむろに立ち上がり言う。
「私、そろそろ行くね」
ベッドから靴を取り出て行く為に歩き出す。
それを見て慌てて啓太は言う。
「追われてんならここに居りゃいいだろ」
アルファは顔だけ啓太の方に向けて、きょとんとする。
驚いたように。

そんな事を言われるのは予想外だと言わんばかりに。
俺はそんな薄情そうな奴に見えたのかよ、と少々むっとするがそこは我慢する。
「私と一緒に居ると死ぬよ？」
サラリと言うアルファにザクン、と何かが抉られた気がした。
こんな言葉が違和感なく入ってくる『異常』に啓太は、アルファの生きる世界が安全ではない事の証明だと思う。
けれど、
否。
だからこそ、少女を追い出す訳には行かないと思う。
「別に死なねえからいいよ。俺には能力（ちから）もある訳だしな」
アルファが暗に、「私の事はほっといて」と、言った事は分かる。
だけど、啓太は分かって敢えて無視した。
「それにさ、目立った事しないでここに居りゃ良いんだろ？」
啓太の言葉にうっ、とたじろぐのが分かった。
「それは……そうなんだけど……」
逡巡するアルファは恐る恐るといった感じで言う。
「良いの？」
「当たり前だろ？」
アルファは目尻に涙を浮かべ、慌てて涙を拭い取ると、満面の笑みで、
「お願いします」

バトル

啓太は魔法使いなどの事は訊かない事に決めた。
アルファが話してくれるのを待つ事に決めたのだ。
嫌な事を思い出させるような事はしたくないからだ。
自分でも阿呆だと思う。
思うけど、アルファの曇った笑顔は見たくないのだ。
古傷を抉るような真似はしたくないのだ。
そんな川平啓太は、悩んでいた。
……う～ん。
居候少女アルファ＝ロートネルを見ながら啓太は考える。
（布団……どうしよう？　……買ってくるか？　いや、でもじゃあ、畳にダイレクトで寝んのか？　いやいや、考えてみたらアルファベッドで寝れねえじゃん）
そう寝る場所の事である。
「寝れねえんなら仕方あるまい。俺がベッドでアルファさんが畳にダイレクトって事で」
なんとなく引け目を感じるが、仕方ないじゃん。アルファはベッドから落ちるんだからぁ！　と言い訳する。
「これが畳の匂い～。ふにゃ～」
畳が相当気に入ったらしいアルファはゴロゴロ転がる。
居候少女アルファ＝ロートネルを見て――。
「――はっ！」
啓太は何か重大な事を思い出したかのように言う。
ふにゃ～としたままのアルファは、
「どうしたの啓太？」
「あ～……別に大した事じゃねえよ」
ふ～ん、と畳ゴロゴロを始める。
啓太は、真剣に考える。

金の事を――。
女の子とはいえ居候が出来たという事は――。
――金が足りるのか？
あわわわぁぁぁあ！！　と苦悩しながら考える。
（仕送りの額の増量をねだった瞬間、家に召喚という事態にも！？）
身体を大袈裟にくねらせて苦悩する啓太を見てアルファが心配そうに言う。
「大丈夫？」
笑顔　（苦い）　で乗り切り、テレビを見る事を勧めてみる。
「え、と……」
何故かテレビの目の前で固まるアルファ。
「どうしたんだ？」
「点け方が分からない……かも」
「かもじゃねえだろ！　つーか、テレビ知らねえんじゃねえだろうな！？」
「知ってる知ってるんだよ！　それくらい！」
どこかの集落で暮らしてました何て言うんじゃねえだろうなあ、と思いながらテレビの点け方をレクチャーしてやる。
魔法使いが襲って来るかも知れねえのにこんなので良いのかなぁ、と思いながらアルファと一緒にテレビを見る。
日本の絶景という題の番組である。
「あ、啓太啓太！　あれが、富士山　（ふじやま）　？　……芸者に天ぷらも出て来たぁぁぁぁ！？」
クイクイと啓太のシャツの袖の辺りを引っ張りながら言うアルファに思わず笑みが零れる。
お父さんみてぇだな、なんか。
あ～！？　養う金がねえんだったああ！！
――――――――そんな平和　（？）　な事で悩んでいたら、あっという間に夜が来た。

啓太は焼き飯を作り始め、アルファを風呂に追いやる。
「一生来なけりゃ良いんだけどな」
勿論魔法使いが、だ。
それにしても、金どうしよう？　バイトでもしようか。
そんな事をつらつらと考えながら米と卵にベーコンピーマンを炒める。
そして、知る人ぞ知る、
味覇　（ウェイパー）　で味を整えて焼き飯の完成だ。
焼き飯が完成したし、トイレにでも行って来ようとトイレに向かう。
「そういや……」
トイレと風呂一緒の室内にあるんだった、と思い出すが我慢しながら焼き飯を作っていた訳でもう限界だったりする啓太は、「まあ、大丈夫大丈夫。一緒って言ってもトイレしながら風呂を覗ける訳じゃなし……」と、言い訳がましく扉を開ける。
シャアアア、とシャワーの音がしアルファのちょっと音痴な鼻歌が聞こえてくる。
しっかりドアも閉められていて中を覗く事は出来ないようになっている。
ほっと一息吐いて正面にあるトイレに入る。
小便が終わり、ドアを開け――石化した。
何せ、現在居候中の少女アルファ＝ロートネルが素っ裸でいたのだから。
白い肌は少し赤っぽくなりしっとりと濡れているし、小さめな胸もしっかり見える。
下の方は、バスタオルで隠れて見えないが。
啓太は頑張って冷静な表情を取り繕ろうとする。
が、しかし女の子の裸を見たのが初めての啓太は凄い表情になっている　（幼馴染である春香の裸は小学生の頃何回も見ているどころか、風呂まで入っていたりするのだが、それはノーカントだろう）

。
「アルファさん？　先ずはバスタオルで隠す事をお勧めします」
言った瞬間、顔を真っ赤にしたアルファに強襲された。
――――――――――――
ふん！　と言ってアルファはふて寝してしまった。
ううう、事故じゃねえか。とは思うが流石に俺が悪かったよなぁと思う。
同棲一日目にして早くもあんなドキドキ純情少年殺害事故が起こるとは思わなかった。
言わずもがな、殺害　（アルファ犯人）　と事故　（啓太の配慮の無さ）　は全く別物である。
と、
ピンポーンという安っぽいインターホンの音がした。
「春香か……？」
たまに料理を持って来てくれたりするので、そう見当をつけてみる。
玄関からは、居間は見えてもベッドは見えないので応対が楽だ。
啓太はドアを開けて訪ねて来た人物を見る。
春香――ではなかった。
黒いローブを着込んだ男が立っていた。
歳は十六、十七、だろう。
肩まである海のように青い髪に、鋭い眼光が何故だかマッチしている。
身長は、百七十前後だ。
少し違和感を感じる啓太だが、顔には出さずに応対する。
「えと、なにか用ですか？」
「うん？　……足跡の主のアルファ＝ロートネルについて何か知ってるかなと思ってね」
瞬間――少しの違和感がニトログリセリンに火を付けたように爆発する。

次の瞬間、啓太は殆ど反射的に真後ろに跳ぶ。
何でだ？　……今まで違和感が小さかったのは――！？
啓太は驚愕を露わにして男を睨め上げる。
その反応を見た男が楽しそうに、
「知ってるんだね？」
魔法使いが喋る。
自分の中の常識には存在しなかった非常識が目の前に存在する。
そのことが啓太を圧倒させる。
雰囲気が『普通で無い』いや、全てが普通で無い男はにやにや笑う。
自分のした行動に激しく後悔しながら言う。
「ああ、アルファからテメエらは悪い魔法使いだって聞いてるからな」
「で、α（アルファ）はどこだい？」
啓太は主導権を奪われる訳にはいかない、と思い矢継ぎ早に質問する。
「テメエらは何者だ！？　俺に何しやがった！？」
鬱陶しそうに、あくびをした後、
「俺は魔術組織の『殲滅黒書』の魔法使いのブライアン＝バロー。君にかけたのは『森の中（インフォレスト）』君――ではなく全員になんだけど……」
「なんだその森の中っつーのは」
「質問が多いね。森の中っていうのはこの格好を見ても『違和感を感じなくする』魔法だよ。だからといって君みたいに俺の正体を知ってる君みたいな奴には効果は薄いんだけど」
そうかい、と返事をする。
とにかく、コイツを部屋に上げてはいけない。
外に連れ出す。
「アルファの居所、俺知ってんだけどな」
瞬間、ブライアンの笑みが消えた。

――――――――

夜の帳が降りた河川敷を二人の男が歩いて行く。

もうかれこれ三十分は歩いているだろう。

「おい！　何時まで歩くんだ！？」

鉄橋の下でブライアンが我慢の限界だと啓太に怒鳴る。

ここは河川敷で雨風凌げる鉄橋の下であり不良の溜まり場なので人気も少ない。

今日は居ないという事は荒れ果てた教会にでも集まっているのだろう。

ここなら勝負しても誰にも迷惑はかからないだろう。

「アルファの居場所なんて知らねえっつーの」

ブライアンは、はあと溜め息を一つ吐いてから。

「ま、予想はしてたけどね」

「はっ、負け惜しみかよ」

啓太の言葉にブライアンは小馬鹿にしたように笑いながら言う。

「負け惜しみ？　……俺は『組織』の一人だと言った筈なんだけど？」

「――しまッッ！？」

ブァッ！　と全身の水分が全て汗となり飛び出してきた。

全身の感覚が無くなったかのように感じる。

ブライアンはどこまでも残忍な笑みで、どこまでも小馬鹿にしたような笑みで、出来の悪い馬鹿を見るように見下し笑う。

「はははははははははっ！　あの子は存在しちゃいけないのさ！　存在しては、ね……」

魔法使いの言葉に啓太は子供のようにびくりと震えてから急いで駆け出す。

「ア、ル……アルファァァァァ！！」

魔法使いに背を向けて走り出す。

「総ての大地よ――我の矛となり盾となれ！　産まれて来い、ゴーレム！」

な、に？　と急いで振り向いた瞬間、どこから沸いてきたのか岩のように堅い物が啓太の背中に当たる。
「ごッッ……ア！？」
ギャグ漫画みたいに、数メートルぶっ飛び、地面に転がっていく。
「行かすと思うかい？」
ブライアンの声。
啓太は辺りを見回すが、ブライアンの前に立っている土偶のような土人形しかない。
という事は先程、啓太をぶっ飛ばしたのは土偶のような土人形らしい。
魔法を使った攻撃だろう。
ゴゴゴゴ、と大地が揺れ動き河川敷の砂がブライアンの前に立っている土偶のような土人形に集まり人の形を成していく。
「な、にを……」
砂がどんどん集まる。
そして、
全長五メートルにも達するであろう不恰好な土人形が出来上がった。
ゴーレムはブライアンの前に立つ。
さながら、王を守る騎士のように。
「有り得ねえ……だろ？」
絶望的な状況に泣きそうになりながら言葉を紡ぐ。
「はははははははははっ！」
ブライアンの笑い声をスイッチにしたように土人形の目が赤く光る。
魔法使いってのは……ここまでデタラメなのかよ、と歯を食いしばる。
脚の震えが自分でも分かる。
ゴアッッ！　と空気を押すような巨大で力強いパンチが啓太を狙う。

震える脚を無理やりに動かしてパンチを避ける。
ボゴオオン！　と落ちていたスチール缶を潰し、土の中にめり込ませ――そのまま地面をも抉り取った。
抉り取られた砂は凄まじい速度で川に飛んで行った。
「な、んだよ……それ」
余りの圧倒的な力に理不尽な怒りさえ感じる。
絶望さえ感じれない程の力量差。
啓太は茫然と抉り取られた地面を見る。
ボコンと地面にぽっかり穴が開いている。
削れた後がそこかしらに見られる。
「ちっ、外したか」
と、心底つまらなさそうにブライアンが言う。
のしのしとゆっくり啓太に近付いてくるゴーレム。
啓太は動けない。
そこまで『死』が迫っているのに。
立つことすら出来ない。
く、そ……が。
「君の覚悟はそんな物だって事か……」
失望感を隠そうともしないブライアンが言う。
ずっ、とゴーレムは弓を引くように腕を引く。
動けよ！　念じるのに、頭では考えるのに、動いてくれない。
ゴオァ！　精巧に造られた岩のように巨大な拳を振るう。
空気のうねりを生み、地面をも抉り取った必殺の拳を――啓太に振るう。
う、ごけえぇッッ！
ドンッッ！　と無理やり身体を動かし、前に走る。
死の恐怖が身体を動かせたのだ。
ボ、ゴオオンッ！　凄まじい衝撃と共に地面が揺れ、砂が石が啓太の背中に叩き付けられる。
「ガ……ッ……！？」

ゴーレムの抉り取った砂や石だ。
『抉り取っただけ』の砂や石なのに、バットで袋叩きされたような痛みを感じる。
「がはっ……げほ……」
息が出来ないがそんな事に構ってられない。
立ち上がろうとするが脚がもつれて失敗する。
「あっ……！？」
ぐしゃり、と地面に倒れる啓太。
そんな無様な啓太を見てブライアンが言う。
「魔法使いでも無いテメエが出来る事なんて何も無い。……降参しろ」
「は……？」
理解が追い付かなかった。
「テメエみたいな奴を殺しても意味無いしな。俺達の目的はあくまでもアルファだ」
ブライアンは鋭い射抜くような目で啓太を見て言う。
「アルファの為に、見ず知らずの他人の為にここまでやったんだ。誰もテメエを責めねえよ。テメエみたいな腰抜け野郎を責める奴なんかな」
啓太は一度、自分の力について考える。
砂や水なんかは自分の掌の体積の二十倍までなら操れる。
ゴーレム全部に重力を加えたり、ほぼ無重力に出来たりする訳ではない。
向こうは一撃必殺のパンチを持っている。
圧倒的に不利なのは完全に啓太の方だ。
「誰が腰抜け野郎だ」
だけど啓太は力強く立ち上がる。
もう震えは無い。
何時も以上に身体は動く。
「諦めないって訳だな？」

ブライアンはニヤリと、まるで熱血教師のように笑いながら言う。
こうじゃねえと面白くねえ、とでも言うように。
「諦めれる訳ねえだろうが」
退く理由なんてどこにも無い。
そんな物はもうどこを捜したって無い。
逆に助ける――諦められない理由なら出来た。
自分には力があるんだから。
もう見ず知らずの他人でも何でも無いんだから。
アルファがこんな魔法使い共に殺されそうになっているのだから。
アルファが俺の事を慕ってくれているのだから。
アルファが好きなのだから。
一つで充分なのにこれ程の理由が出来た。
だから、諦められない。
助けなければならない。
力の差が絶望的だろうが、何だろうが。
だから、言う。
宣言するように。
「ふざけんなよ、俺の覚悟が足りないだ？　なら、テメエを倒して俺の覚悟を証明してやるよ！」
ドン！　足の裏を爆発させるように走り出す。
少しでも速くアルファを助けに行けるように全力で走り出した。

バトル（後書き）

ようやく、バトルパート！！
いや、僕の文才が無いからここまで引っ張っちゃった訳なんですが……。

バトル？

ゴーレム。
土人形。
但し、相当の圧力で固められているのか岩のように堅い。
全長五メートル。
その、ゴーレムを倒そうとする少年がゴーレムに向かって走り出す。
ゴーレムが蹴る。
「あ？」
目の前の地面を無造作に。
瞬間――散弾銃のように砂や石が一斉に襲いかかってくる。
ゴバァア！　津波を連想させる程の巨大な土石流。
「あ、あああああッッ！！」
啓太は反射的に横に跳ぶ。
が、
津波を避ける事なんて出来る筈が無い。
腕をクロスさせ跳んだまま砂の波を受け止める。
砂の一粒一粒がエアガン以上の威力。
砂が皮膚にめり込み、啓太は真後ろに飛ぶ。
背中から打ちつけられる。
「ゴアッッ……！」
肺から酸素が吐き出され、のた打ち回る。
ゴーレムの蹴りが又しても散弾銃を生み出す。
「ッッあッ！」
啓太は立ち上がり、走り、更に能力を発動させる。
先程、啓太の手に当たった砂がゴーレムの散弾銃にぶち当たる。
ゴシャアア！　という激しい激突音と共に砂が巻き上げられる。
真横に重力を加えた結果だ。

啓太は重力を通常通り上からしか変えれないとは言っていない。
どの方向からでも重力を変える事は出来るのだ。
「まさか――魔法使い！？」
愕然とした表情でブライアンが言う。
「うおおおおっ！」
啓太は砂埃の中に突入する。
後は、あの馬鹿デカいゴーレムを無視してブライアンを殴り倒したら終わりだ。
声が響く。
啓太をどん底に叩き落とすような内容の言葉が。
「砂埃を蹴りで薙払え！」
ゾクン！　全身の汗が蒸発するかと思った。
啓太は砂埃の中に入っているのだ。
あんな蹴りを喰らえば間違いなく死ぬ。
ゴアアッ！　空気がうねりを起こし、砂埃を吹き飛ばす。
そして、その砂埃の中に入っていた啓太に蹴りが入り吹き飛ぶ。
数メートルは吹き飛び、ゴガッ！　と痛々しい鈍い音と共にバウンドし、速い速度で川に落ちる。
視界が揺らぐ。
ゆらゆらと、どす黒い川の水が揺らいで見える。
啓太の判断は速かった。
常に手に当たっていた砂埃を重力により押し固め、ゴーレムの蹴りの威力を殺したのだ。
（俺の最大の攻撃をぶち当ててやる）
あのゴーレムの弱点はまんま水だろう。
なら、川の水を利用すれば良い。
啓太は今、手に当たっている水に掛かる重力を器用に変化させて自分の背中を押すようにする。
結構なスピードが出て苦しいが我慢して川を高速で泳ぎだした。
――――――――

ブライアンはつまらなさそうに言う。
「死んだな。ま、ご愁傷様とでも言っておこうかな？」
魔法使いだったという事実には些か吃驚したが。
瞬きの一瞬。
大量の水が――否、津波が襲いかかって来た。
ブライアンの息が死んだ。
全身が凍る。
「な、ん……！？」
ゴーレムはブライアンを守る為に津波に立ちはだかる。
津波がゴーレムの下半身を飲み込み削り取っていく。
浜辺で作って砂の山が波に削り取られるように笑ってしまうぐらい呆気なく、ゴーレムを形作っていた砂が水に削り取られる。
下半身が無くなった所為で上半身が崩れ落ち、ドロドロの泥となり、騎士として機能しなくなる。
「は……？」
茫然と呟く。
今のは、幻だとでも言うように。
ゴーレムの核であった土偶に似た土人形――カバラも波に飲み込まれてしまった。
ゴアアアアッ！！　全てを飲み込む津波は土手の坂でようやく止まり、川に戻って行く。

「誰がご愁傷様だ？」
呼吸が身体がようやく戻る。
代わりに得体の知れない恐怖が全身を駆ける。
息が荒くなっていくのが分かる。
バウンドした時に打ったのであろう頭は血だらけで、身体だってゴーレムの蹴りや砂や石の散弾銃を喰らった所為でボロボロだ。
しかし、立っていた。

愉快に不敵に笑いながら。
「お、前、何で生きている！？」
カラカラの喉で掠れた声を出す。
どんな魔法を使ったのかも分からない内にゴーレムを只の土塊にされた。
これだけの魔法を使える魔法使いが、こんな極東の地で自分に知られずのんびり暮らして居るのは稀な事だ。
「どんな、魔法を使ったんだ！？」
最初はびびっていた所を見ると戦闘経験は殆ど無いだろう。
分かっているのはこの一つだけ。
訳が分からない事が多すぎる。
訳が分からないから恐ろしい。
「はっ、砂を盾に使っただけだよ。魔法使い？　……にしても津波を起こすのは流石にキツすぎたな。余りのスピードに死ぬかと思ったぜ」
ずっと触っていた砂埃を重力を操り盾にしたのだが、ブライアンがそんな事を知る筈も無い。
「ゴーレムは死んだし、コッチの番だな？」
矢のように走り出した。
「ゴーレムッッ！」
出来損ないのカバラをローブから取り出す。
「総ての大地よ――我の盾となり矛となれ！　産まれて来いゴーレム！」
波の所為でドロドロになった砂がカバラに張り付いていく。
間に合わない。
そう判断したブライアンは、新たに魔法を発生させる。
「火の矛よっ！」
轟！　と、酸素を燃やし尽くす音と共に炎の剣が手に現れる。
啓太は、少し表情を歪めただけでそのままブライアンとの距離を縮める。

後、三メートル。
二歩で届く距離。
「あああっ！」
縦に一閃した炎の剣はオレンジ色の軌跡だけを残し啓太に向かう。
それを啓太は、くるりと一回転しただけで簡単に避ける。
「終わりだ！」
拳を握り締める。
「まに、あ、わない」
ブライアンが顔をぐしゃぐしゃに歪め悲痛そうに言う。
「おあああぁぁぁっ！」
啓太は顔面を思い切り殴った。
ブライアンは、竜巻のように回転し、後頭部から地面に激突した。

回復大魔法

啓太は、気絶したブライアンを一瞥してからアルファを助ける為に走り出し――。

ガクン。

「ッッ！？」

身体中から力が抜けていく。

膝が立つ力も無いというように膝がくの字に折れ曲がる。

ベチャリと泥に膝が付く。

ベッドにダイブするように全体重を掛けて倒れ込む。

顔が泥まみれになる。

倒れるのは必然だ。

あれだけ傷付き、あれだけ能力を酷使したのだから。

あの津波は、外側の水に横から重力を掛けて内側の水を押し出し作った能力を最小限に抑えた代物なのだが、それでも能力の限界を突破している、と言っても過言では無い。

だから、倒れない方が可笑しいのだが彼は悔しそうに顔を歪める。

ちくしょ……う、が……。

口をパクパクとさせ、泥が口に入るだけ。

ガリガリと泥を噛み締める。

苦い味が口一杯に広がる。

ちくしょ……お……。

悔しさを自分の無力さを口に出す事すら出来ない。

ちくしょ……。

目の前が霞んでくる。

く、そ……。

目の前が暗闇に塗り潰された。

――――――――

アルファは、魔法使いをなんとか振り切り啓太の部屋に帰ってく

る。
と、
「どっ。どうすれば！？　……ッッ！？　救急車！　何で気付かなかったのよッッ！　私の莫迦！」
と、苛立ちながら少女が言う。
アルファはそんな事は聞いていない。
頭から血が流れ、衣服が破れてぐっしょり濡れている少年が畳にだらしなく横たわっていた。
そんな光景をアルファは見る。
血の気が一気に引く。
どうすれば良いのか分からない。呼吸の仕方さえ忘れる程の衝撃。
「……あ……あ、あ」
絞り出す、と言うよりは思わず、と言った調子で呟く。
現実を否定したい。
でも――出来る筈が無い。
啓太が大怪我をしているのに、苦しんでいるのに、自分一人が現実から逃れて良い筈なんて無い。
アルファは、ふらふらと千鳥足で啓太の元に行く。
啓太の横に座る。
「けい、た？」
けれど、啓太は応答しない。
「啓太……」
反応さえしてくれない。
自分の一部がぽっかりと穴が開いたようだった。
悔しくて悲しくて虚しくて無力だ。
私の所為だ。
私の所為で啓太は……。
目頭が熱くなる。
だけど、涙は流さない。
泣く事さえ許される筈が無い。

「わ、たしが……私の所為で……」
私が、守ろうと決めた筈なのに！
つまらない事で怒って、ふて寝して。
いや、それよりも。
それ以前に。
私が人との『繋がり』何て物を求めなければ。
あの時、あの瞬間。
私が、啓太が危険な時には守ろうなんて馬鹿な決意よりも、『繋がり』を切る決意をしていれば。
私が『繋がり』を断ち切れば良かったのに。
比喩でも何でも無く自分で自分を殺したくなる。
少女は、救急隊に連絡し終わり啓太の前で泣き出しそうなアルファを見て、言う。
私は小金井春香。
あなたは？

――――――――――――

「ま、魔法ッ！？」
小金井春香は素っ頓狂な声を上げる。
目の前の電波少女――アルファ＝ロートネルは言う。
「うん。回復大魔法を使う」
真剣その物の声色で言う。
ハンバーグをお裾分けしに行く途中に啓太が倒れてて運び込んだら、次はオカルト少女かぁ。
少々、げんなりする。
「大丈夫だよ。代償として臓器の幾らかはヤられるけど私の能力があれば回避出来るから」
春香はビクゥ！　と身体を震わしてから。
……駄目だ。
私の手に負えない。
啓太って何かと変人を呼び寄せる能力があるって思ってたけど、

ここまでとは……。
と、少し頭を抱える。
救急車が来るまで、五分ぐらいは掛かるらしい。
「私の魔力は魔法使いに追われてた時に使い切っちゃったの。春香の魔力を貸して！」
魔力とは生命力、気、オーラとも呼ばれたりする。
気を当てて病気を治す、とか気功なんかも魔法の一種のような物だ（厳密には違うが）。
流石に呪文破棄でも、最初のエネルギーは必要とする。
車で言うと、『ガソリン』と『張りぼて』は必要だが、内部の『機械』は適当な『綿』で代用出来ると言った感じだ。
そんな訳で魔力が空になったアルファは春香の協力が必要な訳だが。
そんな事情を一切知らない春香は少しげんなりする。
……つーか、こんな銀髪碧眼の女の子と知り合いって、何があったんだろ？
絵空事のような事を捲くし立てるアルファをほっとこう……と考えたが、この真剣さに負けてしまった春香は少々真剣になって言う。
「何か呪文みたいなのを唱えるの？　やっぱり……」
ううん。とアルファは首を振る。
「下準備は私が全部やるから」
ようやく応じてくれた。と安心したように笑顔で言い、卓袱台に黒いマジックで六芳星を描く。
「そんなので効果あるの？」
「本当は、血で描かないといけないんだけど。私の呪文破棄で不都合な事を全て消せるから無問題」
ばたばたと風呂場から、亀の置物を取って、六芳星の真ん中に置く。
更に、あと五つの空白にそれぞれよく分からない文字を赤いマジックで描く。

「え、とそれは？」
「水の神様に最も近い水の神獣の力を借りて――まあ、亀何だけど……それで、血の増量をして、赤いマジックで描いた別の魔法で傷口を一気に塞ぐ」
何か凄そう！　と、何だかハイテンションになる春香。
「春香。唾でも何でも良いから亀に液体を垂らして！」
「ふぇ！？」
唾を口から出すというのは女の子　（しかも思春期）　からしてみれば大変恥ずかしい事である。
「早く！　啓太の傷を治したくないの！？」
苛立ちを隠さずに怒るアルファ。
「わ、分かったわよ……」
啓太の傷を治したくないのと訊かれれば治したいに決まっている。
魔法、なんて非科学的な物を信じる気にはなれないが。
やってみる価値はあると思った。

――――――――――――

唾液で無くても水道水で良いらしい。
と言うのも、液体を回復薬のように変える魔法らしく本来は血だけしか無理なのだが、アルファの能力、呪文破棄で不都合な血のみというのを無効にしたらしい。
そんな事を聞いた思春期真っ盛りの少女――小金井春香は部屋の隅っこで煤けていた。
……が、目はしっかりと啓太の方に向いていた。
ズリズリと液体が亀の口の中に入っていく。
春香は驚き、そして何故か気恥ずかしくなって顔を真っ赤にし、膝を更に抱えて縮こまる。
アルファはその亀を啓太の方へ持って行き――亀の口から啓太の口へと――。
「きゃあああっッッ！？」
ななに、何してるのぉ！　と、顔を真っ赤にさせて、止めよう

とする。
対して、アルファはきょとんと不思議そうな顔で。
「？　……聖液を飲ませるだけだけど？」
「女の子がそんな事を言っちゃいけません！」
「？」
「なっ！？　必殺純粋少女スキル！？」
「何か良く分かんないけど……」
ぐいっと、亀の口から啓太の口へと口移しさせる。
ごくん、と啓太の喉が動く。
「なはっ！？　あわワぁ？　小学校までは一緒にお風呂に入ってた事もあったんだし、大丈夫！　そう、全然……大丈夫じゃなあああい！」
アルファがじろりと春香の事を見る。
瞬間。
な……ン……！？
春香は凍結したように動かなくなる。
それは、衣服の隙間から啓太の傷口からどろりと何かが溢れ出たのを見たからだ。
透明度の低い白っぽい、例えるならジェルのような、そんな液体のような何かが啓太の傷口を塞いでいく。
ジェルのような物が完全に肌に溶け込んでいく。
傷口が完全に塞がった。
――――――――
「すいませんすいません本当、すいません！」
と春香が救急隊員の人々に平謝りして帰って貰っていた。
春香は、はぁ～。と溜め息を漏らしながら、煤けて帰って行った。
アルファは春香の事が少し可哀想に思えた。
啓太はまだ寝ている。
翌日から、
見事春香は、救急隊員のブラックリスト入りを果たしたのだった。

繋がり

どうやら、丸一日寝ていたらしい。
今は昼間なのだ。
そんな啓太が目を覚ました瞬間言われた言葉がごめんなさいだった。
「ごめん、なさい……」
泣き出しそうな顔で、辛そうな顔で、アルファは謝った。
だからこそ、啓太は悟った。
こいつは、俺が勝手にやった事なのに自分の責任だと思っていると。
「別に良いって。俺が勝手にやったんだ。アルファが気にする事じゃない。それに、こんな怪我を負う覚悟ぐらい最初っからしてたさ……って怪我治ってる！？」
有り得ねえ、と啓太が呆然と呟く。
あんな傷を一瞬で治せる物なんて一つしか思い浮かばない。
魔法だ。
アルファが居心地悪そうに、身体を左右に揺らして何か言いたそうなのだが、啓太は気付いた様子も無く言う。
「えっと……まさか。アルファが治してくれた？」
「春香が治してくれた」
悔しそうに、本当に悔しそうに唇を噛み締めて言う。
「はる……かが？」
一瞬頭が空白になる。
「実は……」
と、アルファが話してくれた。
春香はアルファが組み上げた術式（大魔法）に唾液を垂らす事で自身の魔力を無理やりに注入させたらしい。
「くそっ、そうか」

春香は巻き込めない。
学校で訊かれたとしてもなんとかはぐらかそう。
魔法使いとの戦闘なんかに首を突っ込まれたら春香は死んでしまうだろうから。
「うん。啓太は例外みたいだけど、普通の人は魔法を使えるぐらいの魔力は持ってるから」
「そういえばそんな事を言ってた気がする……」
「私は、魔力が物凄い少ないからね」
「ふ～ん……。……と、ちょっと、待て……。俺の怪我ってどうやって治した？」
「だから、回復大魔法で」
「良く考えると、春香が唾液を垂らして魔法を完成させてからがうやむやだぞ」
「……え～？」
「何とぼけてんだ！？　どうやって治した！？」
「う〝」
実は、春香から口止めされているので迂闊には喋れない訳だが。
「まさかとは思うけど。唾を怪我してる所に塗りたくる……とかじゃねえよな？」
「まあ、うん。そんな所」
「ぬああっ！？　んなもん日常生活で少し擦りむいたりした時に自分のでするようなもんだろ！？　まさかそこから魔法というのは派生していったのかぁぁ！？」
何だか、魔法のルーツが間違っている怪我の治し方からだと勘違いしている啓太にその魔法について語りたいのは山々だが……。
物凄い形相で口止めされているので迂闊な事は言えないのだった。
――――――――
何やら、アルファが変だ。
と啓太は思う。
こそこそとまるで、先輩に告白しようかどうか迷う後輩の如く変

だ。
「あ、啓太……？」
遠慮がちに声を掛けてくる。
「何だよ？」
数十回目なので応対の仕方が機械的且つ苛立ちが含まれてくる。
「……あ～……と何してるの？」
確実に言いたい事はそれじゃねえだろうが！
とは思うが黙っておく。
「魔術について調べてんだよ」
目覚めて全ての事情を聞いた啓太は、また来るんだよなぁアイツら。
と思いネットで『魔術』を勉強してみたのだ。
『黒魔術』
『白魔術』
『ソロモン七十二柱の悪魔の召喚』
『ユング思想』
『黒い雄鳥』
などなど。
調べてみると切りが無い。
「ふ～ん。でもネットで調べても意味無いよ？」
「……どういう事ですか？」
「どういう事っていうか」
アルファはさも当然のように、
「ネットで掲載されてるのって誤情報ばかりだし」
「……まじっすか」
がくり、とキーボードの上に額を乗せる。
「悪魔の召喚方法がこんなに簡単な筈無いしね」
「んじゃあ、全部嘘な訳？」
「うんうん。稀に本当の事を書いてるやつもあるらしいけど。魔術結社が消すしね」

あ、今時の魔法使いってパソコン使うんだ。と何だか新鮮な気持ちになりながら啓太は魔術結社何てものがあんのかよ、とぐったりなる。
「つーか、何で消す訳？」
「魔法が誰でも使えちゃったら魔法使いである価値が無くなっちゃうからだよ」
「……どういう事？」
「もしも世界中の人間が魔法使いになっちゃったら上の連中が、魔法使いが大きい顔が出来ないからね」
「要するにあれか？　俺らは特別な人間だから、お前らとは違う……みたいな」
国が技術を占有するような物なのだろう、と啓太は考える。
「まあ、そんな所だね」
ふ～ん。と呟き時計を見る。
「ん。もうこんな時間か。ハンバーグを電子レンジで温めて食っとけ。俺は……簡易牛丼でも作るから」
ん？　と、啓太はアルファを見やる。
アルファは何か決意したような、表情で啓太を見ている。
「どうしたんだ？」
言いずらそうに、飲み込もうとしたものを吐き出すように言う。
「私が居たら、迷惑になるから……出ていく」
アルファの言葉に、
ブチン！　と啓太は完璧にキレた。
「ふざけんなよ、テメエ」
せっかく命懸けで助けたのに。
返ってくるのは、ごめんなさいだの迷惑だの、出ていくだの……。
「でも……私の所為で！　啓太が傷付いた！　私は何にも出来なかった！」
アルファが感情を爆発させるように叫ぶ。
自分の為に人が傷付くのは嫌なのだろう。

だけど、そんな台詞は啓太の怒りに油を注ぐだけだ。
「ふざけるなよ！　俺はお前に謝られる為に、お前に出て行って貰う為に戦ってたんじゃねえんだ！」
啓太は、只アルファを守りたかっただけなのに。
笑っていて欲しかったのに。
ありがとう――その一言が欲しかったのに。
只それだけだった。
なのに、コイツは――。
「で、も……怪我とかして……るし」
アルファは啓太の事を守り切れなかった事に負い目を感じているのだろう。
時々、小さな小さな嗚咽を漏らしながら言う。
その台詞は、その小さな嗚咽は啓太の心を深く深く――抉っていく。
自分が弱かったから、アルファは泣き出しそうに、辛そうに、悔しそうに顔を歪めているのだろうか。
「はあ～。お前な、分からねえようなら言ってやる」
啓太はアルファを頭を啓太の方に向かしす。
そして、言う。
「俺はアルファをほっとけねえんだよ。魔法使いに追われてるアルファをほっとけねえんだよ。それに、俺とお前はもう他人じゃねえだろ」
直後。
アルファの顔がぐしゃぐしゃに歪む。
それは悲しみではない。
寧ろ、『繋がり』が――この少年との『繋がり』がちょっとやそっとでは断ち切れ無いぐらい強固な物だと分かった喜び。
今まで耐えて、耐えて、飲み込んできた苦しさ。
そんな物が一気に涙となり溢れ出す。
「ふぇ……ん」

アルファの瞳からどこまでも透明な――涙が溢れ出した。
啓太はそれを涙だと認識するのに、数秒掛かった。
溜め込んで物を全て、出すようにそれは際限なく流れていく。
自分で抑えようとしているのに、涙腺がコントロール出来ずに、涙を生み続ける涙にアルファは手の甲でゴシゴシ、と擦る――が涙はそれを越えて溢れ出る。
啓太は、それを見て安心したような、ここまで色んな物を溜め込んでたのかと、苦しくなったりと二つの相反する感情に戸惑う。
「あ～、あのあれだ！　春香のお母さんが作ったハンバーグが美味いぞぉ？　いやマジで。料理店に勤めてるらしいからね」
涙の量が半端で無い。
本気で水分不足でぶっ倒れるんじゃねえの？　と心配した啓太が取り繕うように言う。
「ふふっ……」
慌てふためいている啓太が面白かったのか、笑顔で笑うアルファを見て啓太は心底安心した。

繋がり（後書き）

この小説を書くに辺り、魔術などの勉強をしたんですが……難しい。
ユング思想？　カバラ？　はあ？　と言った感じです。
けど、面白い。
悪魔の召喚方法とか。
まさか占いまで魔術に分類されてるとは！！　……物凄い意外でした。
回復大魔法は、完全なる創作ですハイ。
ゴーレムも創作です。
一応、ゴーレムを作り出す魔術は存在しますが……。
まあ、そんなこんなで魔術を調べてみると面白い事があるかもしれません。
、
ここまでシリアスな物語になる筈じゃなかったんだけどな……。

束の間の休み

「こ、コレは……！」
デミグラソースじゃない！？　と、愕然としながらアルファは、ハンバーグを食べていく。
「あ～。それ俺も驚いたなぁ～」
啓太は独り言のように呟いてテレビに目を向ける。
世の流行に乗ってますと言ったバラエティー番組がやっていた。
リモコンに手を伸ばして、チャンネルを変える。
ニュースに。
「もぐ……啓太ってニュースとか見るような人なの？」
「あん？　何だ、その驚いたような顔は」
啓太だって一応は社会情勢ぐらいは知っとこうと思うのだ。
……まあ、ニュースを見るなんて暇な時しか思わないのだが。
「むぐ……だって、勉強何てしそうに無いし」
「何でそんな事が……」
啓太は部屋の隅に埃と一緒に転がっている宿題を見て、黙り込み開き直った。
「へっ、どうせ俺は八月三十一日に慌てて宿題やるような男ですよ。ケッ」
牛丼をがつがつ食べる。
と、
プルルルル！　とケータイが鳴った。
「……げ、春香からかよ……」
見てみると魔法の事については触れられてなかった。
ハンバーグの事や、銀髪碧眼少女との関係を訊く内容ではあったが。
「なあ、そのハンバーグって美味いよな？　……ん？　何でそんなジト目で俺の事を見てくるの？」

むすっと、
「そういえば、春香とお風呂に入った事あるんだって？」
何だか、わざと啓太に見せつけるみたいに分かり易く唇を尖らせる。
「……あ～。小学生ね小学生」
「へ～？」
とジト目。
「うっ……あれですよ？　幼馴染なんて家族も同然ですよ。あははっ」
流石に俺が意識し始めてもう止めてくれぇぇ！　と叫んだのは言わない方が良いだろう。
「じゃあ、何にも感じ無かったの？」
心機一転、無邪気に小首を傾げて訊くアルファ＝ロートネル。
「さあ～て。英語の宿題でも」
「む。こっちの質問は無視して宿題に移るのかな？」
「え～と。これはｉｓかな？」
「いや、それだと凄い可笑しい文になっちゃうけど」
「そういえば、英語に強い外国人少女が家に居候してたな――これは物凄い戦力に！？」
啓太の言葉が嬉しかったのかふふ～ん。と胸を張って教えてくれる。
「え？　何でこうなんの？」
「いや、だってこれ以外無いもん」
「うだぁ～。無理です無理無理！」
どたっ、と倒れる啓太。
と、そんな啓太を呆れるような目で見てアルファは言う。
「啓太って物凄い馬鹿だね」
「うるさい！　英語なんて無くても生きていけるわ！」
「今時、英語を使えないなんて、国際社会に乗り遅れるよ？」
「うるさい馬鹿！　俺は日本語ぺらぺら外国人女と結婚して無理や

り国際社会に生きる人達の仲間入りを果たすから良いんだ！！」
日本語ぺらぺら外国人少女に向かって言い放ちケッ、とふて寝＋現実逃避を始める啓太。
アルファは顔を赤らめ恥ずかしそうにキョロキョロと目を泳がしているのは何故か？　と啓太は思う。
そして何故、小さな声でままさか、告白？　とか言っているのだろうか？
「あり？　アルファさん？　いやだからさ～日本語ぺらぺら外国人」
と、そこまで言って気付いた。
あ、コイツ俺が言ってる架空の結婚相手の基準を軽々クリアしてやがる……と。
「アルファさ～ん？　別に俺とお前が結婚するとかじゃないですよ？　分かってると思いますけども」
顔を真っ赤にして怒っている思春期真っ盛りの少女に言う。
「にゃっ、わ、分かってるに決まってるんだよ、ばか！」
「顔を真っ赤に染め上げてよくそんな事が言えるなオイ」
言った瞬間、アルファに強襲された。
顔面目掛けてのロケット頭突き&カンフー映画よろしく首に脚を巻き付けての締め上げという高度な技を喰らい昏倒寸前まで逝きかけた啓太はゲホゲホ咳き込みながら言う。
「実は俺の好みは外国人少女じゃないですよ？」
「じゃあ何なのかな？」
「大和撫子で、小野小町みたいな？　より具体的に言うならば、家事が出来て、お琴に茶道とかも極めてて～。んで優しくて包容力のあって、こう……お淑やかで、完璧何だけど可愛さがあるようなそんな――って何だそのへ～、あっそ。みたいな冷めた目線はぁあああ！！」
男女平等とか騒がれてる世の中でそんな人は架空の……否、伝説もはや幻になっていると言っても過言では無いという事が分かっていないまだまだ夢見る少年は絶叫した。

どうすんだよコレェェェ！

啓太はベッドで寝ていた。
アルファは勿論畳だ。
時折、ガタン！　バサバサと言う音が聞こえる。
明日、目を覚ますのが怖い。
正直、男がベッドに寝て女の子が畳で寝ているのはどうかと啓太自身も思うのだが、しょうがないのだ。アルファは、物凄い寝相が悪いのだから。
渡しておいたタオルケットとか、もう触れてもいねえんだろうなぁ。
がつんがつんががが、とヤバめの音が響く。
多分、卓袱台の上に乗ってあったCDケースが降り注いだのだろう。
「ねえ、啓太？」
CDケースが降り注いできて起きたアルファは静かに語り掛ける。
声が闇を怖がる子供のように震えて聞こえるのは気のせいだろうか。
暗闇の所為かやけに大きく聞こえる。
「何だよ」
啓太は、何気ないように返事する。
「何で私が殺されるんだと思う？」
大気が震えた。
「あれだろ？　お前が呪文破棄を持ってるからって」
激しく波打つ動悸を隠すように何気なく言うが、それでも隠しきれず声がアルファのように少し震える。
「うん。私が入ってた組織の名前は『殲滅黒書』」
吐息が凍ったような錯覚に陥った。
「殲滅黒書って……」

なんとか声を紡ごうと搾り出すように言う。
「知ってるんだね。うん。私を殺そうとしてる連中の名前だよ」
「何で……何でだよ」
「仲間を殺す必要なんてあんのかよチクショウ！」と啓太は叫びたかったが叫べる筈が無い。
だから、アルファの話を黙って聞く。
アルファの決意を壊す真似は出来ないから黙って聞く。
アルファは昔話でもするように軽く言う。
「殲滅黒書の目的は、悪魔の召喚、利用や使うと自分にとって不都合のある黒書と黒魔術の殲滅」
流れるように話を続ける。
押し殺している感情を表に出さないようにと必死に何でも無いように語り続ける。
「私の存在は黒魔術の徹底的なまでの利用。黒魔術を自分にとっても都合の良い白魔術のようにしようって考えのグループ何かにとっては」
「そうか……お前の能力は最高だって訳か」
アルファはとうとう堪えきれず殆ど泣き出しそうな声で、
「うん。利用されると」
その先の言葉を出すのを躊躇うように一呼吸置いてから、
「世界を滅ぼす事も出来るから」
啓太は泣くのを我慢して唇を噛み締めるアルファを想像してから思う。
夜にこんな話をしたのは、顔を見られたく無いからかなと。
そう思うと、ムカついてムカついて仕方がなくなる。
「殲滅白書に利用されると、取り返しのつかない事にもなりかねないから。だから……」
苦い思い出なのだろう。
苦しそうに、言葉を押し出す。
「殲滅黒書に殺される事になったの。存在してはいけない、存在し

てるだけで犯罪の犯罪者として」
ふざけやがって……。
啓太は知らず知らずの内に奥歯をギリギリと噛み締めていた。
存在してるだけで犯罪者？
アルファだって望んでこんな能力を手に入れた訳じゃないのに。
啓太は、ムカつく。
仕方が無い事とはいえ自分が何も知らずに生きてた事が。
こんな女の子を犯罪者と言って殺そうとする暗殺者紛いの魔法使い共が。
「ごめんね。今まで黙ってて」
そして、他人にばっかり気を遣う少女の事が。
「本当にふざけやがって」
びくり、と影が震えた。
「お前が犯罪者だろうが何だろうがどうでも良い。お前は悪い事なんてしてねえんだろ？」
影が驚いたように。
「へ？」
と素っ頓狂な声を上げる。
「ったく。電気ぐらいつけて喋ろうぜ」
啓太は、電灯をつける。
いきなりの光で思わず目が眩む。
啓太は、目を擦り見る。
アルファは口元まで引き上げたタオルケットを噛んでいた。
そうでもしないと大声で泣き叫んでしまうだろうから。
「あのなぁ。アルファ。別に泣いたって良いんだぞ？　晩も泣いたんだしよ」
コイツの溜め込んでいる物を考えると、三日間は泣いてても良いと思う。
それぐらいしないと吐き出せないと思う。
しゃっくりと嗚咽の所為で何を言っているのか分からなかったけ

ど、ありがとうという言葉は聞こえた。
何故だかそれは無性に嬉しくて、くすぐったい気持ちにさせる。
「ふぁ……」
アルファは口からタオルケットをゆっくりと放す。
ぼろぼろ、と。涙がみるみる巨大になっていき、零れ落ちる。
幼稚園児のように、溜め込んだ物を吐き出すように大声で泣き叫んだ。

―――――――

アルファは、小一時間泣いた後、泣きつかれて寝てしまった。
啓太は、ハンカチで涙を拭いてやる。
直後。
ゴガン！　と、急所に蹴りが放たれた。
「ゴア、あああ！？」
ゴロンゴロン……六畳一間の部屋を縦横無尽に転がる。
と、
バキン！　とCDケースが割れる音が響いた。
「わあああっ！？」
背中の下敷きになったCDケースが三枚殺られていた。
ゴロゴロ。
「ヤベェ！？」
これ以上アルファを暴れさせない為にベッドに上げて布団と縄で縛り上げる。
ベッドに縄を一周させて縛ったのでベッドから落ちる事も無いだろう。
「げ」
部屋は物凄い惨状になっていた。
何かプスプス言ってるゲーム機。
箪笥の上に直してあった日曜大工の工具セットが散乱してあり、本棚に直してあった漫画や小説がやはり散乱していた。
ガクリと啓太は崩れ落ちた。

思わず乾いた笑みが零れ落ちる。
「うふ、うふふふふふ。あはははははは。……ってどうすんだよコレェェェ！？」

どうすんだよコレェェェェ！（後書き）

評価や感想、指摘をお願いします

途中退場

「う、うううう～、どうして俺がこんな事を」
寝ずに片付けをしていた啓太は、嘆く。
「こんなに部屋をボロボロにした犯人はグ～スカ眠ってるのに不公平だぁ！」
とか言いつつ、片付けをしている啓太は変に優しいのかもしれない。
本を手に取り、棚に直そうとした直後。
ガッ！　注連縄　（しめなわ）　が啓太の首に巻き付ことしてきた。
は？　啓太の思考が一瞬空白になった。
「ッ！？」
腕を首元まで一気に引き上げる。
腕で縄を直接首に巻き付けられるのを避ける。
「すみません。いきなり」
声が聞こえる。
啓太には声の主を捜す何て芸当をする余裕は無い。
ギリギリ食い込んでくる注連縄を相手にするので精一杯だ。
「あ、あああ！！」
グアン！　物凄い勢いと共に開け放された窓から放り出される。
（縄が動いてる！？）
まるで車のように、力強く速い。
啓太は抵抗すら出来ない。
縄が空高く――飛ぶ。
「が、あ……？！」
腕に縄が食い込んで、血が滲む。
更に、腕で首が締まり息が出来ない。
ボロアパートの屋根を越し、更に上昇。

「すみません。あの子を起こしたくないの」
まるで箒に乗る魔女のように注連縄に乗った少女が申し訳なさそうに言う。
（何だ……？　コイツ……）
コレからアルファを殺そうとする魔法使いなのだろうか？
スルリと注連縄が緩まり、十メートル程上空で啓太の腕から離れた。
「っ！？」
注連縄が蜷局を巻き座布団のように啓太の尻に滑り込んだ。
ドスン！　と尻餅を着いた啓太は冷や汗がダラダラと流れ出ているのを感じた。
「び、ビビったぁぁ！」
眼前に居る少女を見る。
思考が混乱した。
ピンクの髪を腰まで伸ばしている女の子だった。
到底暗殺者や何かの類では無いような可愛い女の子だった。
ぴょこんとアホ毛が頭の天辺からアンテナみたいに伸びていている。
大きなアーモンドみたいな碧眼が啓太を見る。
「は？」
「どうしたの？　惚けちゃって」
可愛らしく小首を傾げる――その動作に違和感を感じる。
「いや……え？　アルファを狙ってる魔法使いか？」
「逆だよ」
今度こそ思考が混乱した。
「えっと？　本当に何を惚けてるの？」
「逆って何だよ？」
「助けに来たの」
何でも無いように言う。
「助、けに？」

混乱した頭で考える。
アルファの仲間？　利用する奴ら？　それとも、損得無しで動いている俺みたいな奴ら？
啓太の惚けている顔を見て、少女が言う。
「私達は『黄金夜明け』って言うの。あ、私の名前はレナ・アレンジ。よろしく」
ひまわりみたいににっこり笑顔で握手を求めてきた。
どう見ても敵には見えない。
「あ、俺の名前は川平啓太。よろしく」
手を伸ばして握手した。
温かくて柔らかい手に一瞬びっくりしたと同時に心臓の鼓動が二倍速になった。
（あわ、あわあわあわ！？　女の子ってこんなんだっけ？　いやいや、何か良く分からない生き物だった筈ぅぅ！？）
純情少年川平啓太は一刻も速く手を放したいのとまだまだ握っていたいというジレンマに陥る。
「えっと、離してくれない？」
少し苦笑いしながら言ってくるレナ・アレンジにあはははは、と笑いながら　（但し目は笑っていない）　手を放す。
レナは笑顔で言う。
「それで、私が言いたいのは彼女を引き渡して欲しいって事」
あ？　と啓太の思考が停止した。
三秒後、啓太はその言葉の意味を理解し叫ぶ。
「ふざけんな！　何でテメエらにアルファを渡さなきゃいけねえんだ！！」
何でこんな事を叫んだのかも良く分からなかった。
只、叫ばなければ気が付いたら叫んでいた。
「なら、力ずくでも渡して貰うね」
啓太の生命を支えていた縄が突如として力を失う。
「な……ッ！？」

ふわり、と。
完全な無重力を感じた。
「お、うおおあッ！？」
下から押し上げてくる空気を背中に感じながら、考える。
どうすれば無傷で助かるのか。
「うおおおっ！！」
考え終わる前にボロアパートの瓦の屋根に背中を殴打した。
「ガ……ッ……！」
肺から酸素が吐き出される。
ゴロゴロゴロゴロと、屋根を転がり、落ちる。
アパートのあまり手入れされていない庭に背中から落ちる。
「げふ、ぁ……」
はぁはぁ、と深呼吸をするように呼吸をしていると。
「ｂｌｏｏｄ！ ｆｉｒｅ！」
滑らかな英語。
鋭い声が聞こえた。
直後。
啓太の腕の血が染み付いた縄が啓太に向かって飛んできた。
「くそっ！」
横に飛んで避けた瞬間、縄が燃えた。
より正確に言うならば、縄に染み付いた血が燃えた。
「なんッ……！？」
炎に変換された血が啓太に向かって飛んでくる。
啓太は咄嗟に、転がり回避する。
炎は、空気中で霧散して消える。
「さて、アルファを渡してくれる気になった？」
「誰がなるか！ テメエらがもっと速く救いの手を差し伸べてやらなかったんだよ！？ 何で今になって何だよ！？」
吐き出すように疑問を口にする。
「組織には色々あるの」

達観したような物言いにブチン！　と何かがキレた。
「ふ、ふざけんな！　テメエらは色々でアルファの事を今までほっといたのかよ！　そんな奴らに絶対アルファは渡さねえッ！！」
犬歯を剥き出しにして叫ぶ啓太にレナは一瞬、少し悲しい顔をしてから、
「だから、力ずくでも渡して貰うの」
レナが言う。
「縄よ私を中心点として、私の元へ！」
ズルッ、と何かが引きずる音が後ろから聞こえたので啓太は殴りかかるように後ろを見る。
と、同時に左側に避ける。
筈だった。
「動かねッ……！？」
脚に巻き付いている縄が啓太の動きを完璧に止めていた。
（縄は二本あったんだった！）
「それじゃあね」
レナが言うと同時。
注連縄が啓太に向かって飛んだ。
「おおおおおッ！！」
バチン！　注連縄を拳で弾き飛ばした。
「くッッ！　私の元へ！　高速で！」
ギュン！　と風を斬るように啓太を通り過ぎレナの元へ。
レナは薄く笑う。
啓太の足元に巻き付いている縄が高速でレナの元へ動いた。
「なぁッッ！？」
啓太が地面に引きずられてレナの元へ。
まるで、脚を縛られとバイクで引きずり回されているような感じだ。
摩擦で服が破れ、皮膚が焼かれる。
「ゴアアアッッ！？」

ゴン！　頭が地面に当たる度に意識がトびそうになる。
レナが何かを言う。
啓太を引きずっていた縄が突如、
浮いた。
「な、ふッ！？」
バチン！　自分の能力で飛ばした縄に背中を叩かれる。
逆さまに見えるレナが言う。
「これぐらいの力でアルファを組織から守る？」
レナの言葉が心の大事な部分を抉る。
「うるせぇ……」
言葉に力が無い。
弱いのでも無い。
力さえ無い。
啓太はアルファをこんな奴らに渡したく無いのは事実だ。
だけど……俺は、組織何て物からアルファを守れるのか？
「あなたをこれ以上傷つけたく無い」
悲痛そうな顔が啓太の戦闘意欲を一気に削ぎ落とした。
「けど……俺がアイツを……」
守ってみせる。
そんな言葉が言えない。
今この瞬間ボロボロにされているのは啓太なのだから。
「私達がイギリスの本部でしっかり守るわ」
本部。
イギリス。
啓太が一介の高校生がイギリスまで行ってアルファを守り続ける
なんて出来る訳が無い。
本部って事は仲間が沢山居るのだろう。
啓太よりも強い奴らが沢山。
不意に、涙が零れ落ちる。
ぼろぼろ、と意識もしてないのに涙が溢れる。

悔しさが心を身体を締めつける。
涙の塩水みたいな味を感じながらどうしようもない渇望を叫ぶ。
「俺にもっと力があれば……ッ！」
魔法使いなんてボコボコに出来るのに。
「一人でだってアルファを守れるのに！！」
視界が潤む。
世界は、苦い。
女の子一人守る事さえ絶望的な程、どうしようもなく苦い。
だけど、諦め切れない何かが啓太の中でくすぶる。
この何かを消してくれ！
「チクショウッ……！」
いい加減認めさせてくれ！
いい加減認めろ！
俺に、
俺に……アルファは守りきれない事ぐらい。
とっとと認めさせてくれよ！
何かを消してくれよ！
啓太の顔がまるで拷問を受けているかのように苦痛に歪む。
レナは何を感じ取ったのか。
「私が、絶望する手助けはしてあげる」
直後。
啓太の視界は三百六十度回転した。
蹴られた、と気付いたのが地面に頭を打ちつけた時だった。
啓太はゆっくりと立ち上がり、強く強く目を瞑る。
笑顔のアルファが見えた気がした。
「ありがとな」
ぼそりと啓太はレナに呟いた。
その時点で啓太はアルファをレナに渡す事を決定した事を二人は悟った。
「それじゃあ。いくよ？」

悲痛に顔を歪めたレナが啓太に殴りかかる。
こうしないと、彼に失礼だと思ったから。
「ああ」
啓太は自嘲気味に笑う。
ナイトの役はコレでお終い。
啓太の役は、『黄金夜明け』が担ってくれる。
『黄金夜明け』が啓太以上の力を持ってアルファを守ってくれる。
啓太はアルファが幸せになれれば誰の手で守って貰っても良いと思う。
そう、例えアルファを今まで見ていた奴らでも。
例え――主人公は自分で無く、場つなぎの脇役だったとしても。
「チクショウ……ッッ！」
なのに、何故涙が溢れ出るのか。
自分で自分が分からない。
ガツン！　と、鼻っ柱にレナの拳が突き刺さった。

――――――――――――

六畳一間の自分の部屋で行き所の無いように啓太はぽつんと突っ立っていた。
「なあ、最後の別れってさ……何て言えばいいのかな？」
ベッドごと縄で拘束されたアルファを見ても、笑いも起こらない。
寧ろ、『泣き』の衝動が胸を突き上げるだけだ。
「最後の別れになるかもしれないから、悔いの無いようにね」
悲しみに暮れた啓太を見たからなのか、哀しげな顔をして部屋を出て行った。
「ったく。幸せそうに寝やがって」
泣きそうな声で言う。
アルファのこの寝顔を一生見れないと思うと悲しくて、心が悲鳴を上げそうになった。
何で、こんな気持ちになるのかな？
目蓋から涙が落ちるのを防ぐ為に上を向いて唇を噛み締める。

アルファが、目を覚ます。
「ん？　何か身体が不自由だと思ったら……縛られてる！？　何で！？」
ギタギタバッタン！　まな板の上の鯛のように慌てて跳ね回る。
そんな光景を見ながら、
もうこんな光景を見れないと思いながら、笑顔で言う。
「お前がいけないんだぞ？　部屋をぐちゃぐちゃにしちまうから」
必死に必死に演技する。
目尻に涙を溜めながら、必死に必死に演技だとバレているボロボロの演技をする。
途中放棄した啓太は泣く事さえ、許されない。
「けい、た？　何かあったの？」
心配するようなお母さんのような表情でアルファが言う。
「何でもねえよ」
啓太はギクリとしたが、しらを切る。
それしか出来なかったから。
涙を溜めて泣き出しそうになっているのに。
他人から見ても、何かあった事は明白なのに。
「啓太？」
アルファに何も言う事が出来ない。
「ごめん」
だけど、これだけは言っておきたかった。
「縄の事？」
？　という表情のアルファが不思議そうに言う。
「いや……俺、強くなってみせるから」
思わず泣きそうになった。
「だから、ごめん……」
「啓太？」
コイツを守る方法は――。
「くッッ……！？」

まだ諦め切れていない自分の心に嫌気が差す。
まだまだ、心の底の底の奥底でくすぶっているこの気持ちが消えない事にイライラする。
だけど、
『私の名前はアルファ＝ロートネルって言うんだよ』
アルファを。
『お願いします』
満面の笑みでそう言ったアルファを――アルファとの生活を――永遠に――手放したくない。
そう、すんなり思えてしまう。
『ありがと』
アルファを俺は、力が無いから何て理由で手放すのかよ。
自分で決めた事の筈なのに、こんな結末は納得出来ない。
「こんな終わり方ってねえよ」
アルファの前で泣く事なんて出来ない。
出来る筈が無い。
ナイトの役を――自信を無くして、実力不足で譲った俺はアルファの居ない生活をして、アルファは『黄金夜明け』に守られるのだろう。
アルファの居ない生活――前の退屈だけど楽しい生活。
谷口と、春香と、友達と、ナナ先生と、楽しく暮らしている生活じゃねえか。
コイツが居なくなっても大丈夫な筈なんだ。
二日間しか一緒に居なかった筈なのだから。
大丈夫なんだ。
なのに、泣き出しそうになる。
赤ん坊が駄々をこねるように年甲斐も無くアルファの前で泣きそうになる。
まだ、諦め切れない。
まだ、正体不明の気持ちがくすぶり続けている。

だけど、
だからこそ、啓太は身を退かなければいけない。
アルファを守る為にアルファから離れる。
滑稽過ぎて笑いさえ起きない。
ピエロ以下だ。
客に嘲笑さえして貰えない程に――滑稽だ。
「アルファ……ありがとな」
一泊置いて、言葉を引きずり、押し出す。
「じゃあな。楽しかったよ」
『繋がり』を断ち切る無情の言葉。
その言葉を聞いてアルファは顔を歪めた。
悲痛そうに、絶望の底に叩き落とされたように顔を歪めた。
歪めたまま、笑った。
啓太に大丈夫だよ。と言うように笑顔を見せた。
「ッッ！！」
啓太は耐えられないように顔を背ける。
（く、そ……）
何故だか、そんな無理をするアルファが許せなかった。
こんな他人に任せるだけのバッドエンド――否、終わり（エンド）にさえ持って行けていない途中で投げ出した男に、そんな顔をするなんて許せなかった。
許せなかったけど、自分にそんな事を思う資格さえある訳が無い。
啓太は、この劇から途中退場する為に部屋を出た。
ああ、そうだ。コレからは『黄金夜明け』が主人公になってアルファを守ってくれる。
無理やりにそう納得させてアルファを預ける事しか啓太には出来なかった。

途中退場（後書き）

評価や感想お願いします。

普通の生活

ベッドで寝ていた啓太は、朝の光で目が覚めた。
「もう、朝か……」
台所に向かい、電子レンジで焼いたパンとバターと砂糖にお茶を卓袱台に乗せて食べ始める。
「よっと」
無駄な掛け声と共に転び、リモコンを取ってテレビを点ける。
朝食を食べ終わり、流しで洗い時間になったら補習へ向かう。
「ああ、普通だ」

―――――――――

「にゃあにゃあ、川平ぁ～」
何故か猫口調で媚びるように谷口陸は啓太に声を掛けてきた。
「んだよ」
「これ！　背伸びマシーン」
表紙を叩いて見せてくるのは、何か良く分からない機械だった。
「何だこりゃ！？」
大声でリアクションする。
谷口陸は不審そうに、
「……川平？　何かやたらハイテンションじゃないですか？」
ギクリとしたが、しらを切る。
一番思い出したくない思い出を切り裂き、もう二度と思い出す事の無いように。
「別に何もねえよ。んで、それ何なんだよ？」
「この鉄の部分に頭を挟んで引っ張る機械らしいですよ？」
「どんな背の伸ばし方だよ！？　つーかそれ背骨に相当負担かかるんじゃねえの！？」
「遭難です！　僧なんです！　そうなんですよ！」
ブバアッ！　と、出て来た身長百七十七のモテない男子　（何か

色々モテる為に何かしている）　山下亮　（やましたりょう）　が言う。
青いピアスをしているのが特徴である。
前の補習は熱で休んでいたらしい。
「今のボケは拾わねえぞ」
「なん……ッッ！　しっかりイントネーションを付けたというのに？？　流石ボケ殺しの川やん！」
「山下亮……通称何か良く分からない方向に向かって突き進んでいる哀れな少年　Ｅ　。川平啓太谷口陸山下亮の山谷川というのがやたら気に入っている。その為なのか川やん、谷やんと本人の許可無しに呼んでいる」
「あれじゃないですか？　山谷川って崖っぷちに必要なのが全部揃ってるジャナイデスカ！？」
「だから、崖の必要性ねえじゃねえよ」と谷口陸。
「ゴボアッ！？」
「あれ～俺のささやかなボケを完全無視ですか？　ボケ殺し所じゃねえよこのピアス」
啓太が言った所で、
「啓太♪」
春香がやって来た。
ギクゥ！　と啓太が凍る。
アルファの事を口に出したくない。
会いたくないし言いたくないのだが、言わないと後に回るだけだ、と決意する。
「あの銀髪碧眼外国人少女とはどんな関係なのかな？」
「銀髪碧眼外国人少女ぉぉぉお！？」
金髪の絶叫。
「カァ～ミヤ～ン？　その話。じっくり聞かせて貰おうか？」
地獄の底から絞り出すような声をだすピアス。
「別に、ただの妹ですけども？」

顔色を変えずにボケれたと、啓太は思う。
後は、ただ突っ込んでくれればいい。
しかし、みんなは突っ込まなかった。
啓太の顔があまりにも悲しそうだったから。
端々にしか悲しみは現れていなかったけど、それは確かに深い悲しみの色として現れていた。
「あ～。補習補習」
それを見た亮がう～ん、と伸びをしながら机に戻って行った。
「おおっとナナ先生に怒られんなっと」
陸が机に戻って行った。
春香も戻って行った。
「啓太……諦めちゃけないよ」
何の応援だよ。と笑いそうになる。
もう、とっくに、諦めてるってのに。
そうだ。
アルファとはあそこで永遠の別れをした。
もう二度と会う事なんて無い。
アルファとは『繋がり』を断ち切ったんだ。
なのに、何でこんなにアルファの事が気になるのか。
喉に刺さった魚の骨のように気になってしまうのか。
くすぶる気持ちは何なのか。
それらを全て無視して啓太は言う。
「ああ、普通だ」

普通の生活（後書き）

評価や感想お願いします。

魔法使いとの再開

「すげえ出費だ……」
ガクリ、と肩を落としながら啓太は言う。
「まあまあ」
肩をバンバン叩きながら、朗らかに笑う悪女が一名。
「まさか……八千円も使うとは」
全て啓太持ちで春香と遊びに行ったのだが、物凄い出費だ。
魔法の事やアルファの事は聞いてこなかった。
気を使ってくれたんだろうな、と嬉しく思う。
「うふふふ、明日から朝食は無しだな……はあ」
だけど、八千円という出費は痛すぎた。
春香のマンションまで送る　（啓太の家とは真反対）　。
「じゃあな」
六畳一間のボロアパートとは大違いで、二十階建て、三ＬＤＫである。
「あれ？　何か物凄い悲しくなってきたよ？」
明らかな貧富の差を見せ付けられて物凄い悲しくなってきた。
「何泣いてんの？　気持ち悪いよ？」
サラリと酷い事を言った春香は、マンションの玄関のロックを解除してマンションに入って行った。
「俺も帰っか」
クルリと回る。
と、
「彼女を放ってデートかい？」
不機嫌な表情で言う男が啓太の前に居た。
青い髪を肩まで伸ばした目つきの鋭い――とここまで考えて思い出した。
「ああ、魔法使い……ええっとブライアンだっけ？」

「こっちの質問は無視か。まあいい、お前のアパートに向かう途中に会えた事だし。……彼女を渡して貰う」
「お前さ～。家反対方向だぜ？　春香の家にでも用がある訳？」
ブライアンは顔を恥ずかしさのあまり赤らめてバッ、とこれぞ魔法使いというようなローブの中から封筒を取り出し、啓太に投げる。
「おおっ！？　何だこりゃ」
受け止めて、封筒からＡ４サイズの紙を取り出すが何か外国語で書かれてあって読めない。
（ええっと？）
「まあ、そういう事だから。安心して渡してくれ」
何故か誇らしげに言うブライアンが紙の前で固まっている啓太を不審そうに見つめる。
「何て書いてあんのコレ？」
ガクリ、と肩を落としながら啓太に説明するブライアン。
「要するにだ。彼女の力の利用価値が認められたという事だ」
じゃあ、何だ？　アイツはもう追いかけられずに済むって事か？
それは嬉しい。
アルファは自分が殺されるという恐怖からも解放されるのだから。
だけど、存在しているだけで犯罪者とか言ってた奴らが今更意見を覆すのか？
甘い話だからこそ不信感が強くなる。
「なんで？　なんで今更？」
何故か誇らしげに、魔王を倒した勇者のような得意気な顔で言う。
「俺はな。あの子を殺したくなかった」
辛い事もあったからこその笑顔で言う。
「……」
「あの子がアルファが何故、呪文破棄という能力を持っているという事がバレたと思う？」
「分かんねえよ。んなもん」
「俺が黒魔術を使ってしまったからなんだよ」

苦々しい思い出を語り始めた。

邂逅

「俺達、殲滅黒書はどうやって黒書を消していってると思う？」
「あ？　燃やすとかじゃねえの？　本なんだろ？」
「普通の魔法書ならそうだな。でも一級品の魔法書や黒書はそうはいかない」
その時の事を思い出しているのか暗い表情で言う。
啓太は、ゾクリと戦慄した。
その表情に。彼らとは生きる世界が違うという単純な事実に。
「先ず魔法書を読んでから、魔法的意味を理解する。理解すれば仕組みが分かるからね」
要するに、核を無力化させようとすれば無力化させる為の技術や核の構造を知っとかなければいけないという事なのだろう、と啓太は自分なりに解釈する。
「んで、お前は黒魔術を使ったんだな」
ピタリ、と表情が固まる。
が、それも一瞬。
すぐに、先程の表情に戻る。
「ああ、そうだ。悪魔を使った黒魔術だった」
苦虫を噛み潰すような苦々しい顔をして言う。
「代償は一つの肺を悪魔に差し出す事だった」
「ちょっと待てよ。何でんな事したんだよ？　そんなに悪魔っていうのは魅力的なのか？」
肺を差し出す事を了承するなど啓太には考えられない。
「黒魔術っていうのは――人を惹きつけ魅了する。それに掛からない為の修行だって有るくらいだ」
だけど、俺は魅了されてしまったと悔しそうに言う。
まるで麻薬みたいだ。
する気が無くても、したくなってしまう。

いや、見るだけでしたくなってしまうのだから麻薬より厄介かもしれない。
「失敗したんだ俺は。アルファが俺の魔法陣の中に自分を顧みず突入して来た所為でな」
苦い表情の中にどことなく嬉しそうな笑顔が入っているように感じたのは啓太の錯覚か。
「失敗した時の条件である――『死』をアルファは消し去った」
ニヤリと笑って、
「だけど、コレでアルファの利用価値を殲滅黒書に認めさせた」
バッ、と見せる中かの文字。
アルファベットでもないし、と首を傾げて啓太は訊く。
「それ何だ？」
「ルーンだ！　そんな事も知らないのか？」
苛立ったように答える。
「うるっせえよ！　こちとら魔法何て一切関係ねえ生活送ってんだよ！」
ブライアンは過去形でないのが気に掛かったのか、不審そうな表情になったが、まあいいというように首を振ると得意そうに、
「これはな。殆どの黒書を打ち消す魔法だ！」
難しい大作ＲＰＧをクリアした時のように、頑張って運動会で一位を取った時のようにやり切ったという笑顔でブライアンは言った。
その笑顔が、遠く遠くに見えて眩しく見える。
啓太は、挑戦する機会さえ手放したのだから。
啓太は疲れたような笑顔しか浮かんでこなかった。
「但し、この魔法を使うと魔法を一生使えなくなると言った決定がある」
リスクを怪しまれないように造るっていうが一番難しかったんだがな、と疲れた笑みを見せた。
「つーか、そんなんで殺されなくなるもんなのか？」
「殲滅黒書の存在理由は黒書の殲滅。黒書を無条件に消せるってい

うのにソレを無視してまでアルファを殺そうなんて考えないさ。……まあ、まだ反対意見もあるんだけどね」
「そっか」
アルファの知らない所でブライアンは、アルファの為に魔法を開発して――結果アルファを救った。
俺はどうだ？
アルファの前でカッコつけて、最終的に赤の他人に任せちまった。
「カッコ悪過ぎる……」
重い溜め息と共に心中を吐露する。
「アルファはどこに居るんだ？」
「黄金夜明けっていうグループがアルファを守るってどっか連れて行った」
疲れたように言う啓太にブライアンは眉を顰める。
「黄金夜明けが？」
黄金夜明けはこの件に関しては中立的だった筈。
なら、誰かがその名を語ったのか？
いや、黄金夜明け何て大組織にケンカ売るような真似をする奴なんて居る筈が無い。
コイツが嘘を言っているというのも考え難い。
アルファを守る為にゴーレムにケンカ仕掛けるような奴がアルファを隠す筈が無い。
「ちっ。オイ、黄金夜明けはどこでアルファを匿うって？」
「イギリスの本部でだってよ」
啓太はいきなり話を振られて少しどもる。
「イギリス……ね」
ブライアンがローブからケータイを取り出す。
「うおっ！？　魔法使いがケータイをッ！？」
「何か悪いのか！？」
「いえ別に……ただ……魔法使いがケータイねぇ、と思ってさ」
魔法使いは意外に器用にケータイを扱って電話をかける。

コール三回で電話に出た。
「ブライアンだ。ちょっと訊きたい事があるんだが？」
『ウィ？　ムッシュー。何でジャパニメーション、オタク文化が売り物になっちゃってるジャパニーズで喋っているの？』
何か俺の思ってたやつと違う、と啓太がぼそりと言う。
ブライアンはそんな事を気にする様子も無く。
「あ、いや言語を変えるのを忘れてた」
『要件は？　……ぼりばりバリボリ』
「何食ってんだ？」
『お菓子ですけど？　おかき。ジャパンおかき』
「……ッッ！！　……まあいい。黄金夜明けがアルファを匿ったという情報があるんだが」
ケータイを握りつぶしそうになったブライアンは努めて冷静に言う。
『そんなビッグニュースは入ってませんね～。ボリバリわきゃ！？
魔法書におかきの粉が！　誰か！　濡れティッシュプリーズ～！』
日本語って割とポピュラーなのかなぁとか割とどうでも良い事をボ～、と啓太は思った。

邂逅（後書き）

感想評価お願いします。

教会

ブライアンは、もう訊く事は無いと電話を切ろうとした所で、
『あ、そう言えば『黄金夜明け』がアルファを匿うなんてびっくりビッグニュースは無いですけど～』
間延びした声で電話口の女性が言う。
『黄金夜明けからレナ・アレンジが脱退したらしいですよ』
啓太の耳にその言葉が届くまで数十秒はかかった。
「レ……ナ？」
啓太はその言葉の意味を咀嚼し、消化し、呆然と呟いた。
彼女は『黄金夜明け』がアルファを守ると言っていた。
なのに、脱退？
騙されたとは考えたくなかった。
演技には見えなかったから。
本気でアルファを守ってくれるだろうと信じたから。
「オイ、まさかレナ・アレンジにアルファを？」
啓太は、喋らずに頷いて肯定する。
「ちっ。厄介な事にならなければいいが……」
啓太のアパートとは逆方向に歩いて行く。
啓太は、迷わずついて行く。
レナに事情を聞き出す為に。
あわよくば、勘違いであるように願って。
「君の部屋で探知魔法を使わせて貰う」
颯爽と歩きながらシリアス気味に言うブライアンに啓太は、突っ込む。
「俺んちは反対だっつうの」
な……んッッ……！？　と固まってから、
「早く言え！」
殴られた。

――――――――――

「また、俺が綺麗にした卓袱台が汚される……」

啓太激しく鬱。

卓袱台に周辺の詳細な地図を置いているだけの状態だが、確実に何かされるに決まっている。

「アルファが使ってた私物はあるか？」

ブライアンが聞いてきたので啓太はタオルケットを渡す。

「こんなんで良いのか？」

ん、とこちらを見向きもせずにルーン文字　（なんかアルファベットみたいなやつ）　が書いてある紙で指を切る。

ぷくっと、丸い粒みたいな形を形成している血液が指から出てくる。

地図を一旦退けてから、

卓袱台にびー、と血液の一筆描きで五芳星を描いた。

（ううう、また俺の卓袱台が……）

ブライアンはタオルケットを摘まんで、

「ふんっ！」

力強い掛け声と共にタオルケットは千切った。

「なあっ！？　テメエいきなり人のタオルケットを千切るたぁ、どういう了見だ！？」

怒鳴りつけるがブライアン無視を決め込み更に小さくなった方のタオルケットを千切る。

「テメエ……ッ！　一言言えよ！　俺だって魔法に使うって分かるよ？　でも一言くれよ！　礼儀だろうがそれぐらい！」

面倒くさそうに、

「あ～はいはい。じゃあ千切るから」

ビリィ！

「宣言じゃねえ！」

ビリビリビリィィ！

手のひらサイズになった所でカメラのフィルムケースのような物

に手のひらタオルケットを詰め込む。
五芳星の上に地図を置く。
更にケースを五芳星の先端部分　（地図があるのであくまでも目測）　に置き、
ガタガタ！　ケースが動く。
「おおう！？」
ケースは地図を移動し、真ん中辺りで止まる。
ブライアンは地図を取り、熱心に見る。
啓太も地図を見て、言う。
「教会だな」
「教会？」
「ああ。この教会な、信者がもう居ねえんだよ。神父さんが信者から集めた金を持って夜逃げしたから」
最早あそこは信者も見放したと言う教会だ。
荒れ果てた教会。
またの名を不良の溜まり場とも言う。
そこなら隠れる場所には最適だ。
誰ももう近付こうとはしないからだ。
「なんだと……！？」
わなわな震えるブライアンを啓太は華麗にスルー。
「場所分かったんだしさっさと行こうぜ」
「お前の所為で川に飲み込まれたカバラをゴーレムにするには相当量の砂が必要なんだよ。だから、後から行く」
「ブライアンお前、よく川から探し出せたな。つーか、ゴーレムを見られたらどうすんだよ！？」
「魔法でなんとかする」
「何でもありかよ……」
なんか自分が頑張るのが馬鹿らしく感じる。
「んじゃ、俺一人で行ってくるわ」
後から絶対来いよ、と言って啓太は出て行った。

その人影は――。

アフロ姿になったイエスがこの状況を悲しむかのように十字架に張り付けにされている。
無論、イエスが「俺、今日からアフロでイメチェンするわ」と言ってアフロのカツラを被っている訳ではない。
教会？　はっ、んなもん知るか！　と言った不良達が面白がってイエス様をアフロ化させたのだ。
その不良達は今、自分達がぶっ壊し、端に移動させた椅子に寝ている。
レナが魔法で不良達を気絶させたのだ。
椅子が端に全て寄せられている為に教会は敢然としている。
アルファ＝ロートネルは、縄で雁字搦めにされていた。
雁字搦めとは言ってもキツくて痛いという程ではない。
痛かったとしてもアルファは気にならなかっただろう。
寧ろそっちの方がありがたかったかもしれない。
アルファは何度も繰り返してきた疑問を心の中で呟く。
啓太はどうして私を売ったんだろう？
（もしかして……）
自分の疑問に答えるように心の底で封じ込めていた『答え』が開封されそうになる。
私の事を嫌いになったのかも。
そんな答えがアルファを恐怖させる。
何度もそんな事はあった。
自分は呪文破棄なんて馬鹿げたくらい凄い能力の持ち主だと知るや否や、危険分子だとか存在しているだけで罪だと言われて友達だった人にも殺されかけた。
手の平を返したように、昨日までは笑って喋りかけてくれた人が凍えるような目でアルファを殺そうとした。

だから、味方になってくれた人は物凄い感謝しているし――味方になってくれたのは嬉しい。
啓太は私の事を――どう思ってるんだろう。
どう思って私を引き渡したんだろう？
もう『答え』を持っているにも関わらずアルファは考えた。
そんな『答え』は信じたくなかったから。
何故だからその『答え』は間違っている気がしたから。
レナ・アレンジはそんなアルファを見ながら、魔法陣を教会一杯にラインカーで描いていく。
「その、魔法陣って何？」
黙っていたら望む『答え』より封じ込めていた『答え』が疑問に答えそうな気がしたのでアルファは訊く。
「世界を変えちゃう魔法かな」
「どんな風に？」
「それは言えない」
肝心の内容は教えないレナにアルファが感情を無理やり消したような声質で言う。
「何で……世界なんて変えようとしてるの？」
「私には守りたい人が居るの」
一拍置いて、
「世界を変えようと友達だったアルファを利用しようとね」
決意が感じる程の声で言う。
大声で言った訳でもない。
ただ単にその言葉に決意を感じて、友達『だった』と言われてアルファの吐息が凍りついた。
『だった』それは少女達の間に亀裂が入っている事を示している。
ガラガラガラガラというラインカーを引く音だけが教会に響く。
教会特有の静寂ではない静寂が二人を包む。
アルファが静寂を打ち破るように言う。
「何で……？　何でそんなに、世界を変えてまでその人は助かろう

なんて思ってないよ！　レナ！」
友に道を踏み外して欲しくなくて言う。
アルファは、向こうがどう思おうが関係なかった。
絶対にレナには道を踏み外して欲しくなかった。
自分が傷ついても、向こうが自分を嫌いになろうが、そんな事は関係がなかった。
アルファは未だにレナの事を友達だと思っているから。
殆ど泣き出しそうな声で訴えた。
「そうかもね」
何でもないように答える。
「なら、こんな事止めて、私もどうすればいいか考えるから！」
「アルファが考えても絶対に無理。だから私は世界を変える」
アルファの言葉なんて響いていなかった。
百人賛成している意見に一人が反対しても揺るがないようにレナの言葉には揺るぎがなかった。
かつて、ある少年がアルファの事を他人じゃないと言ってくれた時のように。
アルファはもう喋れない。
喋る事すら許さない雰囲気がレナにはあった。
それ程の強い覚悟があるのだ。
「じゃあ、私が能力を発動しなければ」
「そんな脅しは効かない。呪文破棄の能力は常に垂れ流しの状態。アルファは出したり、引っ込めたり出来るんじゃない」
「……ッッ！？」
アルファは本当に泣きそうになる。
友達だったのに。
その人の為だけに世界を変えてかつての友達だったアルファを利用する程のその人への愛にアルファは泣き出しそうになった。
嫉妬は醜いものだとは分かっているのに嫉妬せずにはいられない。
だけど、それ以上に悲しい。

本当にそんな事でその人が救えると思っている事が。
アルファはその人の事なんて知らない。
だけど、レナがこれだけ固執する存在なのだから良い人に決まっている。
そんな人がこんな解決法を望んでいる筈がないのだ。
望んでいる筈が。
「望んでいる筈がないんだよ！　今すぐにこの魔法を止めて別の方法を取るべきだよ！」
レナがゆっくりと口を開く。
「今更止めるつもりなんて無い。その為にあのお人好しの川平君を騙したんだから」
数瞬の思考の空白の後、アルファはどんな顔をすれば良いのか分からなかった。
笑顔でいれば良いのか。
泣けば良いのか。
驚けば良いのか。
困惑すれば良いのか。
安堵すれば良いのか。
多分、その全てを内包した顔になっているんだろうな、とアルファは思った。
ジワリと、涙が目尻に浮かぶ。
封じ込めていた『答え』ではなくて安堵し、嬉しくなり、思わず泣いてしまう。
啓太と居ると泣く事が多い。
つー、と涙が頬を伝う。
縄で雁字搦めにされている為に涙を拭い取る事も出来ない。
「ふ……はっ……」
本当に啓太が原因で泣く事が多い。
そう思ったら笑ってしまった。
意外に涙もろいんだな、とか。

何故啓太が原因でこんなに泣いてしまうのか、とか。
色々考えたら思わず笑ってしまった。
「大魔法があと一分で完成する」
レナが告げる。
アルファの能力――呪文破棄のお陰で馬鹿デカい魔法陣と真ん中に水の入ったバケツだけで完成だ。
レナは言った。
大魔法を発動させるとバケツの水が蒸発し、世界が変わると。
たった、それだけで世界は変わる。
アルファの能力の所為で、あまりにも簡素な大魔法の魔法陣になった。
アルファが居なければ、魔法の準備に十年はかかる大魔法である。
「あと四十秒」
カウントダウンをしているのは魔力を流すタイミングを計っているからである。
この大魔法には相当量の魔力が要る。
体内の魔力が最高潮の時に魔力を魔法陣のエネルギーとさせる為にカウントダウンしているのである。
魔力とは生命力、気、オーラとも呼ばれたりする。
気を当てて病気を治す、とか気功なんかも魔法の一種のような物だ（厳密には違うが）。
流石に呪文破棄でも、最初のエネルギーは必要とする。
車で言うと、『ガソリン』と『張りぼて』は必要だが、内部の『機械』は適当な『綿』で代用出来ると言った感じだ。
「あと三十秒」
体内の魔力が最高潮の時に魔力を魔法陣のエネルギーとさせる為にカウントダウンする。
ふと、アルファが何も言わないのが気に掛かってレナが言う。
「何も言わないの？　もう諦めた？」
「違うよ」

アルファは笑っていた。
言外にこの魔法は失敗に終わる、と言うように。
「何で笑ってるの……？」
「だって」
啓太は騙されたらしい。
啓太は未だにアルファを捜している殲滅黒書の人達と会うだろう。
こんなに簡単な三段論法も珍しいとアルファは笑う。
その事に気づいたレナは、
あんなにボロボロになってまでアルファを守ろうとした人が果たして、騙されたと気づいて何もしないというのはあり得るのか？
答えはノーだ。
諦める筈がない。
「あと、十秒！」
不意に、教会の扉の前に人影。
その人影の正体は。
「啓太！」

ブライアン

ブライアンは、この間啓太と戦った鉄橋の下で待っていた。
アルファを殺す事が正義だと信じる男の事を。
「速く来いよ、か……」
カバラの代わりの武器、ルーンのカードを手に数十枚持っている。
太陽の光が川に反射され、ルーンのカードに反射しキラキラ光る。
カバラは水に飲み込まれたまま行方知れずだ。
アルファの事は啓太に任せた。
啓太ならなんとかしてくれると根拠も無く信じれる。
いや、根拠ならあった。
初めて魔法使いと対峙したのにも関わらずゴーレムを倒したアイツならやれる。
しかし、俺はアイツに出来ない事をやる。
アルファを救出する為にはあの男を倒す事が絶対だ。
殲滅黒書。
絶対の白、ラルフ・クリフ。
アイツには絶対倒せない。
殴っただけで敵を倒したとか思っている甘ちゃんでは。
だから俺が、
「話たい事ってナァ、何だ？」
独特の喋り方で思考が遮られた。
赤い髪を短く切って、白いシャツ。
瞳はブラウンで、迷いがない。
ブライアンは言う。
「アルファの処置の事だ」
ブンッ、と茶封筒を投げる。
茶封筒を受け止めて中身を見る。
「アァ？」

ビキリ、と顔にマスクメロンのようにビキビキ青筋が立っていく。
「何だ、コリャ！？」
茶封筒を燃やす。
炭になり灰になった茶封筒は風に乗って流されていく。
ブライアンは大して気にした様子もなく強い意志と―ルーンのカード　（力）　だけを持って言う。
「殲滅黒書から依頼も入った。悪魔召喚の魔法陣の殲滅。もうお前に『黒の存在』とは言わせない」
怒りが一周回ったからか、逆に愉快そうにラルフ・クリフが言う。
「馬鹿かテメェらはよォ。アイツは悪魔召喚だろうが、世界反転だろうがほぼ『魔力』のみで何でも出来ちまう反則なんだぞ？　分かってンのカ？」
「俺が決定した訳じゃないからな」
つまらなさそうにブライアンが言う。
「絵本のような魔法使いッてのが悪に回ったらどうなるか分かってンのか？」
馬鹿にしたような口調でラルフ・クリフが言う。
ラルフを真っ直ぐ見てブライアンは言う。
「だから、彼女を俺達殲滅黒書が守るんだ」
迷いがない声で言う。
（正確には殲滅黒書ともう一人か）

「俺はアイツを殺ス！」
黒の存在は消さなきゃな、と犬歯を剥き出しにして低く言う。
そのギャップの所為か一瞬だけ確かに威圧された。
ラルフは作業服のようなズボンのポケットからルーンのカードを取り出し、投げる。
ゴアッ！　空気が限界まで凝縮してから、弾けるように札を中心に空気が吹き荒れる。
ブライアンはトレーディングカードをするように空気中に数十枚

あったカードから一枚だけを選んで置く。
半透明な半円のバリアが展開されて空気からブライアンを守る。
「ハハァ！　ワルキューレの盾か？」
ラルフはルーンを三枚投げる。
札は、炎を纏いブライアンに向かう。
「失敗作だけどね」
直後。
ラルフの足下の土が盛り上がり顎に直撃する。
「ぐ……ッァ！？」
三十センチ程宙を舞う。
ブライアンはニヤリと笑う。
「功防一体じゃないと戦場じゃ役に立たないだろう？」
戦士なんだから、と一気にルーンを十枚投げる。
一枚は凍り、一枚は、火に変わり、一枚は、稲妻に変わる。
ラルフの作った炎と衝突する。
炎と炎の衝突。
混ざり合うようにうねり、稲妻がその間を駆け抜けて爆発させる。
ブライアンは咄嗟に転がり頭を抱える。
「チッ、五枚同時だ」
ラルフの声と同時。
氷の粉砕する音がした。
ブライアンが咄嗟に立ち上がり正体を見極めようとした瞬間。
ゴッ！　交通事故で車に跳ねられた時のように鈍い音がし、吹き飛ばされる。
「ごァア！？　……は……ッ！？」
何が起こったのかも分からずに数メートル吹き飛ばされ、二、三回バウンドして無様にのた打ち回る。
「ほら、もう一丁オッ！」
ゴオオ！　トンネルに風が勢い良く吹き込んだ音がする。
（空気を押し出す魔法！！）

「オァッ！」
カードを地面に向かって投げる。
カードはオレンジ色に変わり、カードの中から膨れ上がり、爆発する。
ゴアアッ！　地面が隆起し、風は斜め上を飛んでいく。
「チィッ！」
ラルフはぶつぶつと魔力を練り上げ、呪文を唱え始める。
ブライアンは唱え終わる前に片をツケる為にカードを全て投げる。
奥の手である二枚のカード以外は全て。
瞬間。
ラルフの作業服のようなズボンのポケットからカードが飛び出してくる。
ラルフとブライアンの中心で全てのルーンのカードがぶつかり合う。
カッ！　カードから魔法が発動した直後。
真っ赤な光が中心から弾けるように外に膨れ上がり、
ゴッッアアアアッ！！　大爆発を引き起こした。

誓い

濛々と立ち込める砂煙。
視界を遮り、前が見えない。
「ハハッ！」
唐突に勝ち誇った笑いが響く。
「ハハッ！　完全に完全だよオイ！　あは、ははは！　風（シュ）の巨人！！！」
風の巨人！？
大気を押し出す魔法でやられた痛みがまた痛くなった。
恐怖。
ブライアンは痛みという恐怖に捕らわれていた。
あんなのを作り出す巨人なんて持って来られたってのか！？
どうやって避ける？
思案の途中に、
ゴッッ！　大気が殴ってきた。
勿論ブライアンには見えない。
砂煙が一斉に大気から逃げ出すように散り散りになる。
「――ッッ！？」
反応。
ローブをバスタオルのように持ち、身体に巻きつける。
そこから、ローブを噛み千切れば、ローブに痛みを肩代わりさせるという防御魔法が発動出来た。
しかし、時間が余りに足りなかった。
正面から大気の拳がブライアンを貫く。
「ゴッッあ……ァ！？」
腹から背中にかけて鈍い痛みが走り抜ける。
空中に投げ出され、後ろに飛ぶ。
更に、後ろから大気が殴りかかってくる。

ブライアンは気付く事すらなく、後ろに飛んだ速度と後ろからの大気のパンチの所為で圧倒的な衝撃を背中に受ける。
「――カッッ！？」
肺から酸素が一気に漏れ出る。
ガフッ、とドロリとした血が唾液と一緒に口から飛ぶ。
進行方向を無理やり変えられたブライアンは前に三十センチ程飛んで落ちた。
「……ァ」
肺に酸素を取り入れられない。
視界がぼんやり霞んでくる。
不意に、霞ががっていた脳裏に『あの時』の場面が映し出される。
儀式場。
正四角形で作られていて、面積は五百平方メートルは下らない。
全てが真っ白な正四角形の部屋だ。
余計な物は一切入れていない。
というより、何も無い。
その儀式場に黒魔術に魅入られたブライアンが魔法に要る道具を用意して、今まさに魔法を発動した所だった。
視界が闇に染まり、何も見えなくなる。
――ああ、失敗したのか。
――だけど、これで良かった。
――殲滅黒書の一員の癖に、黒魔術に手を染めたんだから。
そして、不意に、明かりが、光が一筋の線となり、闇を突っ切りブライアンを照らした。
「大丈夫ッ！！　私が――」
力強く温かい声だった。
（闇が無くなって、彼女の姿を見た時は驚いたなぁ）
ひゅーひゅー、と呼吸をしながらブライアンは過去の思い出に笑う。
『人の命を助けるのは当たり前だよ』

知らない女の子が迷いなく自分も巻き込まれて死ぬかもしれないのに来て俺を助けてそんな真っ直ぐな台詞を言った。
どれだけの強さが必要なのか、日常的に魔法使いと戦っているブライアンには分かる。
だから、
『もしも君が危険な目に遭ったら俺が絶対に助けてやるよ』
そう誓った。
「風の巨人の力を思い知ったか？」
ブライアンは、諦められない。
「風の巨人？　それがどうした」
ブライアンは真っ直ぐに言う。
「ア〝ァ？」
気分を害されたと言う感じで言う。
アルファは、自分が死ぬかもしれないのに俺を助けてくれた。
だから、
「俺が……助けるんだ」
今度は俺が助けるんだ。
もう二度と絶対に破らない誓い。

黒魔術

「守るとか訳分かンねえ事言ってねえでアレの居場所を教えろ」
無様に這いつくばっているブライアンに冷ややかに命令するラルフ。
「アルファを物扱いするな……！」
低く底冷えのする声で言う。
「ホンッとにテメェは分かってンのかよ！　アレの危険性がよォ」
ブライアンの頭の上に脚を上げる。
「アァッ！？」
ガン！　踏みつけた。
「あッ！」
頭が割れたかと思う痛みに耐える。
アレが見つかるまでは動けないのだ。
「テメェは……アレが黒魔術何て使う馬鹿に手に入れられてみろ！
人間神様世界、果ては平行世界まで支配出来ちまうかも知ンねえンだぞ？　分かってンのか？」
腹を蹴り上げる。
ボグ、という鈍い音と共に口から血飛沫が出る。
「バケツと紙とインクと粉で神様の宝具も要無しだ！」
真シハの器、ロンギヌスの槍、天地海の杖、紅の涙、深緑の翠石、砂の黄石、サラディアスの杯、贋龍の牙、シーダラスメントの書、ゼノミトの腕輪などなど。
全てが要無し。
真シハの器は普通の食器で代用出来るし、ロンギヌスの槍は水糊で代用出来てしまう。
それ程のデタラメ過ぎる能力をアルファは持っている。
世界さえ、アルファと魔法使い一人に勝てないだろう。
分かっている。

危険な存在だという事くらい。
それでも、
「ふざけるな。あの子は何故死ななければならない？　何の罪も犯してはいないのに！　あの子はただの女の子だ！」
ラルフは何も分かっていない哀れなブライアンを悲しそうに一瞥し、
「そうか……お前は世界を変えるかもしれない存在を庇うって訳か……なら」
一呼吸の後、
「死ね！」
大気が、当たれば間違いなく肉塊になるだろう速さでブライアンに襲いかかる。
「待て！」
大気がブライアンの横の地面を抉り取る。
台風のような破壊ではない。
ワンポイント、一点に定める事で威力が凝縮されている。
まるで、弾が一メートル程のライフルのようだ。
「何？」
ラルフは簡潔に訊く。
（あと、一分……あと、一分でアレが見つかるんだ）
落ち着く為に深呼吸をしたいが、そんな事でラルフの気に触ったら、死んでも死にきれない。
今は何もしないのが吉だ。
「ちっ、何もねぇのかよ。殲滅黒書の仲間だったンで遺言でも聞いてやろうかと思ったけど……」
ブライアンは内心勝機を見いだせた事に喜んだが、次の言葉で絶望した。
「やめた。お前の場合、何か仕組んでそうだしな」
ブライアンは慌てて言う。
「待て！　いや、待ってくれ！　俺は……俺を助けてくれ！　俺達

仲間じゃねえか！」
延命する為に必死に縋る。
ラルフは、犬歯を剥き出しにして叫ぶように言う。
「そんな風に無様に命乞いして俺の親も黒魔術師に殺さた！！」

ゴーレムＶＳ風の巨人（前書き）

あとがきにお知らせがあります。

ゴーレムVS風の巨人

ブライアンの命乞いにラルフは怒りを通り越して得体のしれない感情に突き動かされて誰にも言わなかった事を何も考えず叫んだ。

「黒魔術師が！　俺の親を殺したンだよォォォオオオオオァァ！」

親は普通のサラリーマンと専業主婦。

普通とは違う所は魔術に興味があったぐらいだ。

ある日二人は大魔術陣を組み立てた。

効果は、天使の召喚。

それは二人の間違い。

本当の、効果は、悪魔の抹殺。

悪魔をパワーソースとし、魔法を発動する黒魔術師がそんなのを放っておく筈がなかった。

どうやって知ったのか？

単純な事だ。

二人は、この国のこの街の教会でやっている所を黒魔術師が偶然に見つけたのだ。

「俺は何も出来なかったッ！　アハハハハハ！　笑っちまうよナァ！？」

ぶちまける溜まっていた鬱憤を全て。

「俺だけは助けてくれってよォ。『俺』が命乞いしたんだよテメェみてえなァァァァァァァッッッ！！」

過去の自分を踏み潰したい。

過去の自分を殺したい。

守るべき物を捨てて自分の命に走った最低な自分を殺したい！

その欲望を。

ブライアンを過去の自分と重ねて猛烈な勢いで腕を踏み砕く。

「ガアッ……！？」

親が命乞いしたのではない。

ラルフは快楽に歪んだ顔でブライアンに言うというよりは独り言のように絶叫する。
「自分だけは助けてくれッて命乞いしたンだよ！　テメェみてえになァァァァァッッッ！　だから俺の親は殺された！　俺はァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！」
自分に怒り狂いながらブライアンの頭を踏み潰す。
ラルフはそれがただの八つ当たりに似た行動だと分かっている。
しかし、止められない。
自殺する勇気もなく、ただひたすらに黒魔術を憎む事で辛うじて抑えていた自分への自責の念。
それが、黒魔術の存在を絶対に認められない理由。
黒魔術を憎み、殲滅するより、自分に似た馬鹿野郎を踏み潰す方が気持ちが良い。
直後。
殺したいという衝動がラルフを刺激した。
「はははははははははははッッッ！！　ぶち殺すぶち殺してやるよォォォオオオオォォォォオオオオ！！！！」
喉を逆らせながらただ叫ぶ。
大気で造られた全長五メートルの見えない巨人がブライアンに殴りかかる。
ブライアンは大気で固められた、壁のような物が超高速で自分に当たった――としか感じられない筈だ。
ブライアンの横にある地面のように跡形もなく消え去っている筈だ。
筈なのに、ブライアンは生きていた。
地面はニメートルは抉れているのに生きていた。
ラルフはブライアンのローブが千切れ飛んでいるのを見てどう凌いだのか知る。
ビキリ、と青筋を立てて叫ぶ。
「とっとと死ねよォォォオオオォォォオオオオッッッ！！　何で死なね

えんだよ！　どっからどこまで俺何だよォォォォォォォォオオオオオオオオッッ！！」
ゴアアッッ！　大気の巨人が拳を振るう。
ブライアンはうっすらと笑みを浮かべる。
「あ～、あと二秒だったんだけどな」
ブライアンはそんな言葉と共にアルファを助ける為に残しておいたルーンの魔法を発動させる。
トランプカードと同じ大きさのカードが、三メートル弱の水の巨人に変わる。
大気の巨人の拳を自身の水の身体で受け止め——水の巨人は霧のように消えた。
直後。
「本場のゴーレムの力を魅せてあげるよ」
砂が、ブライアンの元に集まっていく。
「最後まで抵抗してンじゃねェよォォォオオオ！！」
大気の巨人は腕を引く。
「総ての大地よ——我の矛となり盾となれ……産まれて来い、ゴーレム」
大気の巨人が殴ると同時。
ゴーレムが産まれた。
全長五メートルの巨人が大気を受け止める。
ドオオン！　そんな音が響き渡った。
「ラルフ、お前は許さない」
ブライアンは真剣な表現で言う。
「はっ！　何を許さないンだ？」
「生き方も、弱さも、アルファを物扱いした事も、全部だ！」
巨人と巨人が拳を交差させる。
土の巨人は腕が削ぎ落とされる。
風の巨人はそのまま土の巨人の拳を通す。
「なっ！　貫通しただと！？」

ブライアンは驚愕する。
土の巨人は、バランスを崩して風の巨人の方に倒れ込む。
ゴッ！　風の巨人の拳は土の巨人の頭を吹き飛ばした。
「俺のどこが弱いッてェ？」
ブライアンは、答えずラルフの元に走る。
ラルフは、笑う。
「風の巨人　（シュー）　！」
風の巨人の胸部から、人体を破壊するには十分な速度を持った大気がブライアンを狙う。
ブライアンは、気付かない。
勝った！　ラルフの確信は崩れ去った。
どこからともなく出てきた水に邪魔されたのだ。
「アルファを守る為に1ヶ月かけて制作したルーン魔法をよくもここで使わしてくれたなぁ？」
あの水の巨人はアルファを守る為の魔法なのだ。
水蒸気となりアルファを見守る魔法。
アルファを追いかけ回したのはラルフにアルファを殺されたくなかったから、一刻も早くにこの魔法をかけたかった――という理由がある。
それ程にこの魔法の防御力は高い。
拳の射程圏内まで走ってきたブライアンはラルフを殴った――とブライアンは思った。
風の巨人がラルフを後ろに押したのだ。
「ッ！？」
驚愕するブライアンを見てラルフは満足そうに言う。
「その魔法――ずっと続くもんじゃねェよなァ？」
風の巨人はブライアンに殴りかかる。
水が風の巨人の拳を弾く。
「こんだけの威力の攻撃をずっと食らったら、魔力が底をついちまう！」

攻撃を防御する毎に魔力を大量に消耗する。
「オオァ！」
走り、ラルフを殴ろうとするが、ラルフはバックステップでかわしてしまう。
元々、ブライアンは肉体労働は向いていないのだが、泣き言を言っている場合ではないのは分かっているが、こんな勝ち方以外の勝ち方が見えないのだ。
ちくしょう！　あの変幻自在のゴーレムを倒す手段何て存在するのか？
ブライアンのゴーレムと同等の力。
同等のスピード。
しかし、ブライアンのゴーレムには無い力がある。
不可視の身体と大気になる力。
不可視の方はなんとかなる。
風の巨人の殴る音や、先程気付いたのだが歩く時に足下の砂が浮くので分かる。
しかし、後者は質が悪い。
大気を押し固めてゴーレムの一撃を防いだり、殴ったり、普通の大気になる可能だから倒す事なんて出来ない。
今から殴っても無駄だろう。
けれど、殴らないと進展しない。
「ゴーレムッ！」
ゴーレムはラルフに殴りかかるが、風の巨人に止められてしまう。
風の巨人がゴーレムを蹴る。
は？　ブライアンは一瞬惚けた。
馬鹿みたいな光景に。
ゴーレムの腹の部分が――ブライアンの身体は楽に覆える程の砂が――砂の一粒一粒が野球選手が投げるボールより速い砂がブライアンに向かって飛んでくる。
目測にして、百六十キロ前後。

ズダダダダダッッ！　ブライアンの全身を水が覆い、砂が水に突っ込む。
ブライアンの魔力が底をついたのかギリギリ全ての砂からブライアンを守り終わった水が弾け飛んだ。
ゴーレムがぎし、と軋んで動かなくなる。
「俺の防御魔法が……ッ！」
ブライアンは、最後の砦が無くなった事でうろたえる。
「今度こそ終わりだなァァ！？」
ブライアンに風の巨人が殴りかかる。
ブライアンは、音により前方に居ると確認。
ゴーレムが風の巨人のパンチを受け止める。
な……ッ……！　とラルフは驚きを露わにし、
「何でゴーレムが動いてる！？」
ブライアンは、余裕の表情で、
「芝居を打ったに決まっているだろう。俺のゴーレムは核を潰さなきゃ動き続ける。更に俺の魔力はまだまだあるぞ？」
魔力がなくなったという芝居をすれば、少なくとも防御魔法が無くなったとなれば風の巨人がブライアンを殺す為に殴ってくるという事は予想していた。
逆に先程の手法できたとしても、ゴーレムに守って貰うつもりだった。
要するに、風の巨人のパンチもあの馬鹿みたいな攻撃もこの芝居の為にわざと食らっていた訳だ。
「終わりだな？　ラルフ」
腹に穴が開いているゴーレムが弓を引くように腕を引く。
「大気に変えれば……ッ！？」
ラルフは気付いた。
大気に変えれば、自分がゴーレムに殴られるという事に。
ブライアンはもう一度言う。
「終わりだな？」

ゴーレムは風の巨人に殴りかかる。
風の巨人が慌てるように腕を引くが遅い。
ゴーレムが風の巨人を殴り飛ばした。
風の巨人はラルフを巻き込んで数メートルは吹っ飛んだ。

ゴーレムＶＳ風の巨人（後書き）

超・魔法の第二部を見たいと言う人は是非感想に送ってきて下さい。
新しい小説を書くべきか迷っているんで……。
感想が来た場合は喜んで書きますよ（笑）
構想はし終わっているので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8938j/

超・魔法！？

2010年10月9日19時49分発行